

經濟·社會編

サイモン・グレイの人口論——十九世紀

初頭に現はれたる英吉利ポピュレイション

ニスツの一研究

南 亮 三 郎

目次

- 一、開題——マルサス人口理論の研究より下る
- 二、反マルサス陣營における「樂觀論者」と「人口主義者」
- 三、グレイの三著作とその輪郭
- 四、「流通體」及びその需給の理論
- 五、人口原理論——マルサス説の批判
- 六、人口の食物規制論——マルサス説批判の特論
- 七、人口増加の作用論
- 八、人口増加の反作用と將來觀
- 九、グレイ學説の論理的構造とマルサス批判の成敗
- 一〇、グレイ及び一般人口主義學説の學史的並びに理論的意義

一、開題——マルサス人口理論の研究より下る

人口學說の一般に書かれたる發展史の上から云ふと、人口の増加をもつて國富増加と國民繁榮との原因と見る謂ゆるポピュレイシヨニストの人口論が十六世紀末から十七、八世紀にかけてのヨーロッパ諸國に行はれたるメルカンテイリズムの一係論であること、即ち要するにマルサス以前の舊人口學說に屬することは確かである。然しマルサスの時代、少くとも彼れが主著『人口原理論』の第一版（一七九八年）を草し、又その第二版（一八〇三年）の増訂に従事しつゝあつた當時までは、ポピュレイシヨニストの人口思想は依然として各國の主要政治家の頭腦を支配してゐた。イギリスの宰相ピットとかのナポレオンとが、海峽を隔てゝ互ひに呼應するが如く、盛んに産兒の奨勵を行つてゐたことは有名な事柄である。それには當時、ナポレオン戦争に伴うての軍人必要の増加、産業革命に伴うての新機械操縦者の需要増加、等々の歴史的特殊事情はあつたが、政治家達の口から洩れる言葉はおしなべて、産めよ殖えよ、而して人口は殖ゆるほどその國は榮えん、といふに一致してゐた。さればこそマルサスの『人口原理論』はこの種の熱狂的なポピュレイシヨニストの人口觀の偏見に對して、最終決定的な一撃を加へることをその一つの使命としてゐたのである。即ち彼れはこの著の第二版において次の如く論じてゐる。

「人口問題に關する偏見は、正貨に關する往時の偏見と非常によく似てゐるが、吾々は、この後者がいかに遅

遅として又いかなる困難の後に、より正しき概念に席をゆづつたかを知つてゐる。政治家達は、有勢であり且つ繁榮してゐた國々が殆んどつねに人口稠密であつたことを見て、結果を原因と取り違へ、そしてそれらの國の繁榮が人口〔増殖〕の原因とは見ないで人口〔増殖〕が繁榮の原因であると結論するのであつて、それは丁度往時の政治經濟學者達が、正貨の豊富を國富の結果とは見ないでその原因であると論結したのと似てゐる。正貨に關するこの偏見は今日ではすでに打破せられてゐるが、「幻想はなほ人口に關しては残つてゐる。

そしてかゝる妄信から殆んどすべての政治的論著は、その扶養手段に殆んど或ひは全く顧慮しないで、人口〔増殖〕の促進策に充滿してゐるのである。¹⁾」

かくてマルサスはこの點に關する先行諸學者、特にジェームズ・ステュワートの謬見を指摘していふ、

「この點では、一般に人口問題を巧みに説明したサー・ジェームズ・ステュワートも、誤りに陥つてゐたやうに私には思はれる。氏は確言して曰く、増殖が農業の有効因 (efficient cause) であつて、農業が増殖の原因ではないと。然しながら、よしんば、土地の自然的產物によつて安易に養はれ得る以上に人民が増殖したことによつて初めて土地を耕やす必要に迫られたものであり、又家族を維持せんとする考へ、乃至は農業生産物と交換に或る有價なる代價を獲得せんとする考へが、耕作に對する主たる刺戟としてなほ作用してゐる、といふことは承認してもよいとしても、而かもなほこれらの生産物が、その自然的狀態においては、いかなる永久的増殖も恐らく支へ得られる前には現存人口の最低の欲望を超えてゐなければならぬ、といふことは明白であ

1) Malthus, An Essay on the Principle of Population, 2nd ed. London 1803, pp. 473—474; 5th ed. 1817, vol. iii, pp. 38—40; 6th ed. 1826, vol. ii, pp. 237—238.

る。吾々は、出生の増加が、農業には何の作用も與へないで起り、たゞ死亡の増加によつて隨伴せられたに過ぎない、といふやうな事例を無數に知つてゐる。然し農業の永久的増大がどこかで人口の永久的増大をひき起さなかつたといふやうな例は、おそらく存しない。従つて、人口が農業の有効因ではなく、より正當には、農業が人口の有効因であると云ふことが出來よう。むしろこれらは確かに相互に反作用し合ふのであり、そして相互の支持の爲めには相互に必要なものではあるが、このことは實際、人口問題がそれによつて回轉する蝶番てふつがひであるやうに見える。そして人口に關する一切の偏見は、おそらく、かゝる優位の順序を取り違へたことから起こつてゐるのである。²⁾」

人口學說の發展史上におけるこの獨自なるマルサスの地位は、それ故に、今までのマルサス研究家達によつても強調せられて來た。例へばさきにフェッターは「彼れ「マルサス」の理論は、有勢にして繁榮せる國々において認められたる強大なる人口増加が繁榮の原因である、といふ舊來の理論に對する一反動である³⁾」と述べ、又近くはペンローズが、マルサスの基礎的命題たる人口増加對土地制限の着想はすでに「マルサスの時代以前に始まつてゐた、然しマルサスは、それを生氣ある論點とし、それを公けの討論の前景に持ち出し、そして人口の増加はそれ自身で必ず望ましいものだといふ觀念を粉碎した最初の人であつた⁴⁾」と論ずるのである。だが然し、嚴密にいふならば、マルサスが果して人口の増加それ自體を無條件的に惡の根元として拒否し去らうとしたかどうかは一つの問題であるが、次いではマルサスの意圖せるものと覺しき最終決定的な反駁が果

- 2) Malthus, An Essay, 2nd ed. pp. 476—477; 5th ed. vol. iii, pp. 44—46; 6th ed. vol. ii, pp. 241—242.
- 3) Fetter, Versuch einer Bevölkerungslehre, ausgehend von einer Kritik des Malthus'schen Bevölkerungsprinzips, Jena 1894, S. 40.
- 4) Penrose, Population Theories and their Application, California 1934, p. 5.

してポピュレイションニスト的人口増加謳歌論の熱狂を完全に封じ去つたかどうか、又この熱狂はたとへ時代とともに封じ去られたとしてもそこには何らの残るべき理論もなかつたのかどうかは、更に大いなる第二の問題である。右第一の問題については、本稿の筆者はすでに近時の一、二の勞作の中で論及し、マルサスに關する通説的解釋の不備を補はうとしてゐる⁵⁾。本稿は即ちこの論點に關聯せしめて右第二の問題に答へようとするものである。筆者の願ひは然し、この回答をして單なる學說史的興味の満足に終らしめず、形の上においては學說史的問題の取扱に據るとは云ひながらそれを通じて人口理論の體系化的構想に近づくの一階梯たらしめたいと思ふにある。蓋しマルサスの論著は人口理論に關する凡ゆる近代的思索の出發點を成すものであるとともに、その當時活潑に行はれたるマルサス論争の全記録はこれを仔細に跡づけゆくならば——まさにボーナアの注意せる如く⁶⁾——すでにその中に「全繫争問題に關する吾々自身の判斷を形成するに充分なる資料」が見出され得るからである。

二、反マルサス陣營における「樂觀論者」と「人口主義者」

さてマルサスの存命當時より十九世紀末までに彼れの學說に對して現はれたる幾つとも數へ切れない程の多數の「反對者」「批判者」「答辯者」の主だつたものの中に、人口學說史家によつて多く「樂觀論者」と呼びな

5) 拙著、人口理論と人口問題、昭10年千倉書房、251頁以下；及び拙稿、マルサスのパッション論（商學討究10卷上冊、昭10年6月）55頁以下參照。

6) Bonar, Malthus and His Work, 2nd ed. London 1924, p. 2.

されてゐる一群の人々がある。例へばエルスターは『國家科學辭典』第二卷中の寄稿文において「十九世紀におけるマルサス學說の反對者」を三群に分類し、その各々に代表者を掲ぐることに次の通りである。¹⁾

1. 社會主義者——Godwin, Fourier, Proudhon, Engels, Marx, H. George, etc.
2. 樂觀論者——Gray, Grahame, Weyland, Sadler, Senior, Everett, Alison, Bastiat, Carey, List, F. Engel.
3. 自然科學的見地より出發する反對者——Doubleday, Spencer, Nossig, Jarrold.

右のうち第二群についてエルスターはいふ、「人口理論家の一大集團を吾々は簡單に樂觀論者(die Optimisten)と名付けることが出来る。樂觀論者はマルサスによつて言ひ表はされた杞憂を正當とは認めず、そして〔第一群の社會主義者とは異なつて〕現存の國家秩序並びに社會秩序の改變を要求することなしに人口状態の將來の形相に望みを囑するのである。個々の點においては、即ち例へばマルサスを彈劾する仕方や人口運動に關して樹立する理論においては、以下に掲ぐる著作者達は相互に非常に隔たつてゐる。彼等が結びつく一點は即ち將來への期待である²⁾」と。これに従つてイギリスだけの代表的「樂觀論者」を拾ひあげると Gray, Grahame, Weyland, Sadler, Senior, 及び Alison の六人となる。

次いで、かのモムベルト——その人の分類に移る前に——の勝れたる女弟子の一人にウアズラ・シアンがあり、その學位論文は『イギリス樂觀論者の人口學說³⁾』の研究に充てられてゐる。この論文はその師の主著よりも先きに刊行されたものであるが、こゝではエルスターの指摘せる例の六人だけではなく、アメリカ人 Everett

1) Elster, Art. Bevölkerungslehre und Bevölkerungspolitik in: Handw. d. Staatsw. Bd. II, 4. Aufl. Jena 1924, S. 773—787.
2) Elster, a. a. O. S. 781.
3) Ursula Schian, Die englischen Optimisten in ihren Bevölkerungstheorien, Diss. Giessen, Breslau 1926.

を加へ、更にエルスターにおいては「自然科学的見地より出發する反對者」として謂ゆる「樂觀論者」より區別せられたる Doubleday, Jarrold, Spencer の三人をも併せ取扱うてゐる。「樂觀論者」の總括名稱はかくてシヤンの論文においては、十九世紀前葉に輩出したるイギリスの殆んどすべての——恐らくは只一人ゴドウィンを除きて——主要なる人口論者を蔽ひ盡してゐるのである。

だが前掲エルスターの分類に加工しながら、しかもシヤンよりも遙かに徹底的に「樂觀論者」の範疇を擴めゆかうとするが如くに見えるのはモムベルトその人である。即ちモムベルトはその主著『人口論』中の一章「マルサス以後現代に至る迄の人口論の發展」⁴⁾において、この期間中の人口論者を先づ

I. 悲觀的見解の代表者

II. 樂觀的見解の代表者

の二大群に大別し、後者をば更に細分すること次の通りである。

- a. 自由主義者の集團——Grahame, Gray, Weyland, Everett, Sadler, Alison, Senior, Carey, Bastiat, Wirth.
- b. 發展史的觀察を爲す者——List, Dühring.
- c. 社會改良主義者及び社會主義者——Sismondi, Owen, Simon, Cabet, Fourier, Thompson, Marx u. Engels, Kautsky, H. George, Oppenheimer, Marlo, Lange, David.
- d. マルサスの生物學的反對者——Doubleday, Jarrold, Spencer, Nossig.

4) Mombert, Bevölkerungslehre, Jena 1929, S. 195 ff.

右のうち a の「自由主義者の集團」(die liberale Gruppe) についてモムベルトはエルスター、シアン等の分類に注意していふ、「マルサス學說の反對者、特に自由主義の地盤に立つ反對者を人は樂觀論者と名付ける。この立言は全く適切であるが、その際ただ、この樂觀主義が決してこの方向のすべての代表者によつてひとしい仕方基礎付けられてゐないこと、實は全く種々なる出發點を有することを見通してはならない⁵⁾」と。これによるとエルスターの場合に指摘されたと同じイギリスの六人のマルサス反對者、即ち Gray, Grahame, Weyland, Senior, Sadler, 及び Alison は、「全く種々なる出發點を有すること」の爲めにも基いてエルスター及びシアンにおけるが如く「樂觀論者」と名付けるよりも、むしろその上に立つ「自由主義の地盤」に因んで「自由主義的集團」と呼びなすのをモムベルトは、より合目的と考へるやうである。だが然し注意すべきは、モムベルトが「樂觀論者」の總括名稱を拒斥し去るのではなく、實は却つてこれをエルスターの場合に於けるよりも、否な更に進みてはシアンの場合よりも一層擴大し、ただにこの自由主義者の集團だけではなく、發展史的觀察を爲す者も社會改良主義者及び社會主義者も、更にはマルサスの生物學的反對者も——即ちこれを總じて上掲 a、b、c、d の四集團にわたるところの實に凡ゆる側面よりするマルサス反對者乃至批判者の總陣營を「樂觀的見解の代表者」として締めくくり、以つてマルサス追従者の一團たる「悲觀的見解の代表者」に對立せしめてゐることである。かくてモムベルトにおいては、問題の「樂觀論者」の範疇はエルスター及びシアンの場合に比し、一面においてより嚴密なる規定を與へられやうとしながら他面においては遙かに廣漠たるものへと

5) Mombert, a. a. O. S. 207.

擴がつてゐるのである。

念の爲めに挿記するが、モムベルトは前掲引用文の一章句——「マルサス學說の反對者、特に自由主義の地盤に立つ反對者を人は樂觀論者と名付ける。」——に註記して、エルスター及びシヤンの外に、同じ意味において人口學史家ゴンナアル及びモールへの参照を求めてゐる。然しゴンナアルにはかゝる秩序立つたる分類は無いし、モールには詳しい分類はあるけれども「樂觀論者」の項目は存しない。モールの記述はむしろその著の出版年代に限定されて十九世紀の中葉までにしか及んでゐないが、ここでは先づマルサス學說の反對者を

1. マルサスによつて樹立せられたる最高原則を拒否するもの
2. 根本原則は承認するけれども、その原則より引き出されたる結論の正しさを否定するもの
3. その攻撃が完全なる誤解に立脚せるもの

の三類に分ち得ることを述べて、後代のポーナア3)の分類に一先鞭を着ける。然しモールは右第一類の反對者につき更にこれを細分して、共にひとしく最高原則を拒否するもの間にあつても二つの根本命題「人口の幾何級數的增加と生存資料の算術級數的增加」を兩つとも拒否するものと、その何れか一つを拒否するものとに分たれるとし、結局次の通りに分類記述を進めるのである。

- a. 兩原則の反對者——Ensor, Ravenstone, Morel-Vindé, Sadler.
- b. 幾何的比例における増殖の反對者——Jarrod, Godwin, Doubleday, Spencer, Guillard.

6) Gonnard, Histoire des Doctrines de la Population, Paris 1923, p. 311 ff.
 7) v. Mohl, Die Geschichte und Literatur der Staatswissenschaften, III. Bd., Erlangen 1858, S. 490 ff.
 8) Bonar, Malthus and His Work, p. 394 ff.

c. 生存資料の單なる算術的增加の反對者——Gray, 匿名の Reply to the "Essay" の著者〔引用者曰く、これは Hazlitt を指すものゝ如し〕、E. Engel.

d. マルサスによつて引き出されたる結論のみを拒否する反對者——Grahame, Weyland, Everett, Senior, 1832年の匿名著者〔同じく引用者曰く、これは T. R. Edmonds〕、Scrope, Alison.

e. 誤解に基く反對者——Carey.

f. 批判者——Sismondi, Barmont, Hoffmann, Schmidt, Richerand.

この種の分類はマルサス學說の個別的批判を直接の問題とする場合には非常に便利であるが、その代りマルサスの反對者なり批判者なりの思想傾向乃至は學說の特徴が少しも表面に現はされ得ない憾みを遺してゐる。どのみち、いづれの分類方法にも難點はつきまとひ、或る角度よりして適切なりと思はれる分類も他の角度よりすれば不充分なものとならざるを得まい。しかも筆者はこゝでマルサス反對者の分類方法を詮議立てしようと思ふものではないが、謂ゆる「樂觀論者」の所在を確かめる爲めに以上掲げた諸家の分類によつて現在行はれてゐる主要なるものをほゞ網羅し得ることになつた。「樂觀論者」の所在は必ずしもすべての人口學史家の採る分類に現はれてゐるわけではなく、又その範圍も諸家の間に必ずしも一致してゐるのではないが、反對者達の思想傾向を表面に浮き立たせたものとして興味あるエルスター、モムベルトの分類をとほして、ともかくもこゝに、「自由主義の地盤の上に立つ」ところの、そして「人口状態の將來の形成に期待」して人口對生存資料

間の根本的不調和といふ意味におけるマルサス學說を彈劾せんとするところの、一連の「樂觀論者」の所在だけは明示せられたのである。

然しながら筆者は、本稿の冒頭に指摘しておいた通り、マルサス論争の單なる學史的經過の記録に終始しようとするのではない。論争を通じて「吾々自身の判断を形成する爲め」の手懸りを得ようとの特殊なる意圖を有してゐる。然るに今、この特殊なる意圖を先立たしめてマルサス反對者の一群——オプティミスト——を眺めてみると、それらの人々の學說は「樂觀主義」乃至は「自由主義」といふ語をもつて言ひ表はすべく餘りに明確に限定せられたる特徴を有つてゐるやうに思はれる。特にイギリス「樂觀論者」の最初の三人——Gray, Grahame, Weyland——は「將來への期待といふ一點において結び着く」と言ふよりも、むしろ筆者は、學史的には一般にマルサス以前のものと考えられ勝ちな、かの人口の増加を國民福祉の原因と見るポグデュレイション^{Pogdunlay}の學說的な立場において、よりよく結び着き得るのではないかと考へる。將來への期待といふ一點を前面に押し立てるならば、社會の現状に不満を抱き理想社會の到來を想望せし社會主義的人口論者をもこの中に含ませなければならず、かくてその範圍の限りなく擴まりゆくこと、やがてはマルサス反對者の全陣營をその中に包み込まねばならぬといふ如きモムベルト的結果に立ち到るのほかに無いであらう。或ひは又、道德哲學的な功利主義乃至は「自由主義の地盤」を、彼等を結び着ける共通特徴として置きかへるにしても、今度はマルサス反對者相互の間の分類においてではなく實はマルサス反對者とマルサス自身との間の「分類」が見失はれてしま

ふといふ結果に落ち着かざるを得ないであらう。問題のマルサス反對者だけではなくマルサス自身も亦これと同じ道徳哲學的「地盤」の上に立つてゐたからである。

在來の「樂觀論者」——少くともその中に包括せしめられてゐた若干の人々につき——の名稱に代へて筆者がこゝで新たに「ポピュレイションニスト」の名稱を與へようとするのは、然し決して、在來の特徴付けが不満足であるとの前述の理由からだけではない。前述の理由は單なる消極的意味をしか持つてゐない。それには更に積極的な理由がある。即ち先づ、この部類に屬するマルサス反對者の或る者は彼等の側における學說の根本特徴を明白に指摘して彼等自からを「ポピュレイションニスト」と呼んでゐる證據がある。後に詳しくその著を考察するが、一八一八年に“George Purves”なる假名のもとに Simon Gray の刊行したる論争書『グレイ對マルサス』の序文 (Say 宛公開書簡の形をとれる) の中で著者は、凡そ人口論には

1. 食物主義學說 subsistence theory (antipopulation theory)

2. 人口主義學說 population theory

の二類型あるものとして分ち掲げ、前者を主張するものを「反人口主義者」(antipopulationists)、後者を主張するものを「人口主義者」(populationists)と名付けながら、前者には James Stewart 及び Mr. Malthus があり、後者には Mr. Grahame, Mr. Weyland, 及び特に『國家の幸福』の著者「Gray 自からを指す」が屬すると説いてゐる⁹⁾。蓋しこの著者において人口理論の根本性格を決定すべく見えるものは、食物が人口を規制するの

9) Purves, Gray versus Malthus. The Principles of Population and Production investigated, London 1818, p. iii.

か、それとも逆に人口が食物を規制するのかといふ一般問題に對して與へる回答の如何であつて、「食物主義學說」とは前者を肯定するもの、而して「人口主義學說」とは後者を肯定するものである。かくて Gray は一八一五年より一八八一年に至る三、四年間に相次いで執拗な攻撃をマルサスに向つて加へた右の三人を人口理論上の「人口主義學說」の代表者とし、彼等自からを「ポピュレイシヨニスツ」と呼んで、マルサス反對者の一集團を特徴付けるのである。

思ふにこの特徴付けの正しさは、Gray 自からは別として他の二人に、及び彼等以後のマルサス反對者中の如何なる人に如何なる程度で當嵌るかは仔細の研究を俟つてのみ確定し得るところであるが、特徴付けそれ自體が非常に適切であること、少くとも在來行はれ來つたものに比して遙かに勝れてゐることは確かであらう。それはこの一群のマルサス反對者の根本的立場を浮出せしめるに適切だといふ學史的敘述の便宜問題の爲めばかりではない。實は、後に至つて筆者の論結するであらう如く、マルサス學說に對して彼等の提起したる問題はその形式と内容との如何に拘らず、現代においてもなほ依然として未解決に屬する人口理論上の一基本問題を衝いてゐるからである。

筆者はこゝで先づマルサス批判者としてのポピュレイシヨニスツ——それはマルサス以前に輩出してゐた同一名稱の人口論者から區別する爲めにネオ・ポピュレイシヨニスツとでも呼ぶ方が至當であるかも知れない

——の最前衛たる Gray の研究を行ふが、發表の機會が次第に整備せらるゝのを待つて、相次いで Grahame, Weyland 等へと及んでゆくつもりである。これらの人々をポピュレイションニストと呼びなすことの當否もその後決定せられていゝ。ただ一つこの稿を進めゆくに際して筆者の腦裡にこびりついてゐるのは、これらの人口論者について従來の學說史的研究家より與へられてゐる好ましからざる既成觀念である。それはむろん、これら論者の所論が多く誤謬と獨斷とに基いた取るに足らぬものであるとするに傾いてゐる。尤も Weyland については夙にモールが「冷靜な、條理の立つた著作」¹⁰⁾と評定し、近時日本においてもこの論者にかんりの評價を與へようとする人も出てゐるが、Gray や Grahame については語られたことすら少く、「非常に平凡な且つ高度に鈍重な結果」に終つたといふ評言¹²⁾、乃至は「觀察の淺薄と事實の相違」といふ風の評言が行はれ來つたものと考へていゝ。むろん筆者は、これらの評定は決して根據なしと云はうとするのではない。マルサス自身も、Weyland の著作には尊敬を拂うて應酬したが、Grahame の著作はこれを “a slight work without any very distinct object in view”¹⁴⁾と評し去り、繰返して戦ひを挑み來つてゐる最前衛の Gray に對しては終始默殺の態度を固持し、つひに一言の應酬をも與へなかつたやうに思はれる。

當のマルサスにおいて既に然りである。これらのマルサス反對者達の所論が今までの學史的研究家によつて特別の注意をひかれることなしに過ぎ去つて來たのは、決して謂はれなしとはしないのである。マルサス理論の研究と並びて本稿から始めゆかうとするその反對者達の研究が——さきに指摘せる如き新たな人口理論的

- 10) v. Mohl, Die Geschichte u. Literatur d. Staatswissenschaften, III. Bd. 1858, S. 504.
 11) 例へば吉田秀夫氏著, マルサス批判の發展, 昭8年弘文堂, 174頁以下参照.
 12) v. Mohl, a. a. O. S. 500.
 13) 伊藤久秋氏著, マルサス人口論の研究, 昭3年丸善, 262頁.

課題の要求からも發足してをるとはいへ——その到達するところ或ひは Gray 自身の著作と同様に「非常に平凡な且つ高度に鈍重な結果」以上に出で得ないのではないかを虞れる。筆者を鼓舞するものには然し、更にモムベルトの次の言葉があるのである。曰く、

「樂觀論的方向の祖國はイギリスである。こゝで初めて現はれ來たるマルサス反對者の大部分のものは十八世紀の原始的、個人主義的理念から發足するのであるが、しかも彼等のうちの多くの者にあつては人口と經濟との關聯に對する眞に注目し値ひする洞察が現はれてゐる¹⁵⁾」と。——乞ふ、しばし筆者とともに、想ひを十九世紀初當の一ポピュレイシヨニストの著作へと沈めゆかん。

三、グレイの三著作とその輪郭

先づ原典について云ふと、Simon Gray の著作としてこゝに筆者の利用しゆかうとするものは次の三著作である。

第一著、『國家の幸福』——The Happiness of States: or, An Inquiry concerning Population, the modes of subsisting and employing it, and the effects of all on Human Happiness. London 1815. 4 to pp. 598. [東京商大圖書館所藏メンガー文庫: Eng. 617.]

14) Malthus, An Essay on the Principle of Population, 6th ed. 1826, vol. ii. p. 476.

15) Mombert, Bevölkerungslehre, S. 207. 傍點引用者.

第二著、『グレイ對マルサス』——Gray versus Malthus. The Principles of Population and Production investigated: And the Questions, Does population regulate subsistence, or subsistence population; Has the latter, in its increase, a tendency to augment or diminish the average quantum of employment and wealth; and Should government encourage or check early marriage; discussed (pseudonymous: George Purves). London 1818. 8vo pp. 496.——〔同じくマンガー文庫: Eng. 1221.〕

第三著、『富の生産と人口の評論』——Remarks on the Production of Wealth, and the Influence, which the various classes of society have, in carrying on that process: in a letter to the Rev. T. R. Malthus, occasioned by his attempt to maintain the division of classes into productive and unproductive. London 1820. 8vo pp. 32.〔同じくマンガー文庫: Eng. 620.〕

これらの著作が何をマルサス批判の上に、従つて又人口理論の發展の上に寄與し得たかは第二の問題として、著作それ自體が從來の多くの學史的研究家の目に觸れてゐなかつたことは事實である。エルスターは數行の記述をグレイに與へ、上掲の第一著と第二著、及び一八一七年の別の一論文を指摘しはしたが、その何れにも目を通す機會を持たなかつたことを註記して、「これらの著作は余の手に届かなかつた、余は上の記述においてモールの『國家諸科學の歴史及び文献』第三卷中の記述に従つてゐる¹⁾」と斷はつてゐる。遡つてモールを検すると、そこには簡略ながら要を得たる紹介と批判とが與へられてゐるが、問題となつてゐるグレイの著作は

1) Elster, Art. im Handw. d. Staatsw. Bd. II, S. 781 n.

上掲の第一著だけである。²⁾ シアンのグレイ研究は第二著だけについて行はれ、³⁾ その師モムベルトは第一、第二の兩著を指摘してはゐるが、肝心の著者名 S. Gray を一度までも G. Gray と誤記（或ひは誤植？）してゐる。⁴⁾ ボーナア⁵⁾ やスチヴン⁶⁾ やゴンナアル⁷⁾ はマルサス批判者中にグレイの名をさへ掲げてゐない！ かういふ意味においては、そのボーナアの「有益なる助言」下にマルサス研究を進められたといふ伊藤教授が夙に日本に於てグレイの第一、第二の兩著に論及せられたのは、⁸⁾ 筆者の敬服を禁じ得ないところである。序でながら日本において最近に編まれたる二つのマルサス關係文献目録⁹⁾ は、グレイについては申し合はせたやうに第一著を掲げるに止まつて、マルサス批判書としては、より直接的且つ遙かに系統的なる第二著を洩らしてゐる。

筆者は上掲のグレイの三著を、それぞれの書目末に索引番號を註記しておいたやうに東京商科大学圖書館所藏の『メンガー文庫』について親しく披見するを得た。同じ獨逸の最高文化圏内に住してゐながら、人口學史の専門的研究家にさへ「手の届かなかつた」グレイの三著ばかりでなく、實に周到に且つ廣汎なる規模において人口文献をよく蒐め藏してゐたカール・メンガーの學識素養の廣さと深さとに心打たれるとともに、極東の地に在つてなほこれを繙き得る吾等の幸福を感謝したい。

さて上掲三著の輪郭であるが、先づ第一著『國家の幸福』について。後にグレイ自から表明したところによると、¹⁰⁾ この著はすでに一八〇四年——マルサス人口論第二版の翌年——に出版の準備成つてゐたが事情に妨げ

2) Vgl. v. Mohl, Geschichte u. Literatur d. Staatswissenschaften, Bd. III, S. 500.

3) Schian, Die englischen Optimisten, S. 8 ff.

4) Mombert, Bevölkerungslehre, S. 207.

5) Cf. Bonar, Malthus and His Work, p. 355 ff.

6) Cf. Stephen, The English Utilitarians, 2nd ed. London 1912, vol. ii, p. 238 ff.

7) Cf. Gonnard, Histoire des Doctrines de la Population, p. 311 ff.

られて遅れたといふことである。直接にマルサス説の攻撃をその表題に表はしてはゐないが、もしもその豫定の年に刊行されてゐたとすれば、この著はジャロルドのマルサス答辯書やハヅリットの匿名のマルサス辯駁書¹¹⁾などの出現に先立つて、おそらくは最初の浩瀚なるマルサス駁論書として、より多くの注意をひいてゐたかも知れない。事實上それは一八一五年——マルサス人口論第五版の前々年——に現はれてをり、その前後はマルサス自身の側においてはかの穀物條例論及び地代論争に寧日なき頃であつた。——ともあれ、四ツ折判六〇〇頁に僅か二頁の不足を示すに過ぎない尨大なる『國家の幸福』は、すでに形の上において優にマルサスの主著（その第二版は同じく四ツ折判、本文六〇四頁）に匹敵するものである。著者の主觀的意図においては眼中にマルサスなく、一世を風靡せしアダム・スミスの『國民の富裕』に、名實ともに格付けようとするにあつたものとも推察される。事實上マルサスとは異なる人口理論——この著者の場合にも然か呼び得るならば——をその全所論の根幹に据ゑ置きながら、その時代の朝野の論議の最尖端に上りつゝあつた「マルサス」の名をさへ文中に引いてゐないのである。

主觀的意図の極めて高かつたと思はれる『國家の幸福』は、かくて、次の八編より成る。——第一編「緒論」、第二編「Circuland 即ち流通の物資について」、第三編「流通物の交換的種目即ち貨幣について」、第四編「人口について」、第五編「食物について」、第六編「人口及び食物の相互的影響について」、第七編「缺乏について」、及び第八編「荒地即ち未開墾地について」。このうち今の場合直接に關係ある如く見えるのは第四、第五、

8) 伊藤久秋氏著、マルサス人口論の研究、261—263頁。

9) 加田哲二氏編、マルサス人口論及び經濟學說關係文獻（三田學會雜誌29卷1號、昭10年1月）；及び吉田秀夫氏編、マルサスに關する文獻集（人口問題資料8輯）昭10年7月、刀江書院。

10) [Gray,] Gray versus Malthus, preface p. iv.

第六の三編に跨がる人口及び食物論であるが、グレイの人口學説の基礎には一般經濟學上の流通論乃至需要論が横たはつてゐるので、第二編も亦極めて重要である。筆者は後の論述において『國家の幸福』から引用を爲す場合には主としてこれらの四つの編に着眼するが、なほ必要ある場合には他の諸編の記述にも觸れてゆくであらう。

第二著『グレイ對マルサス』は前著より三年を隔てゝゐる。その間に同類のマルサス反對者の陣營内からはグレイアムの『人口原理の研究』¹³⁾及びウェイランドの『人口及び生産の諸原理』¹⁴⁾の二著が刊行されてをり、マルサスの側においてはすでにその主著の第五版が完成して莊重なる全三卷の書物となつて市に出てゐる(一八一七年)。グレイはそれを見てゐた筈である。然しグレイを焦慮せしめ、第三者の假面——“George Purves”——を被つて改めてのマルサス批判を試みる一方、われみづからの學説を「グレイ氏曰く」の形で極度にほめ稱へんとする苦肉の策にまで驅り立てたものは、必ずしも如上の兩陣營内のそれぞれの成長發展といふ客觀的事實だけではなかつたかも知れない。マルサスの第五版はその第三卷の終りに重要な長文の附録を新たに添へた。その附録は、正にこの前年に現はれたるグレイアム及びウェイランドの二著に對するマルサスの詳密なる反批判であつた。だが然し、そこには、グレイの大作『國家の幸福』に對する一語の論及さへ見出されないのである。默殺に對する苦肉の策、——かくて“George Purves”氏はこゝに『グレイ對マルサス』の一卷を提げて蹶起したものと解し得る。

- 11) Jarrold, Dissertations on Man, philosophical, physiological, and political; in answer to Mr. Malthus's "Essay on the Principle of Population" London 1806.
 12) [Hazlitt,] A Reply to the Essay on Population, by the Rev. T. R. Malthus. In a series of letters, to which are added, extracts from the Essay; with notes. London 1807.

この第二著はむしろ第一著と比べてその根本思想に何の變化も發展も示してゐない。内容の上では第一著における人口論的敘述の部分基礎とし、それからの多くの引用を爲すことによつて「グレイ氏」の學說を整備し、以つて「マルサス氏」の學說と比較對照しながら、決定的な軍配を前者にあげようと企圖したものである。然し、その爲めに、マルサス批判はこの第二著に至つて初めて具體的、且つ細目に亘ることとなり、兼ねてグレイ自身の人口學說も系統的に要説せらるゝこととなつてゐる。即ち本著は五編から成つてゐるが、その要目は次の通りである。——第一編「人口の原理」、第二編「グレイ氏の確言する如く人口が食物を規制するか、そも又マルサス氏の主張する如く食物が人口を規制するか?」、第三編「人口は雇傭に關して供給過剰となる傾きあるか?」、第四編「人口は増加する場合所得と富裕との平均額を増す傾きがあるか、それとも減する傾きがあるか?」、及び第五編「二學說の結果を含めての、若干の實際的論題」。なほ卷末にはセイ宛の三つの書簡(Three letters to M. Say.——1. On the source of productiveness in point of wealth, 2. Utility, not the principle of productiveness, 3. Chargeability, as the source of productiveness.)その他を附載してゐる。

第三著『富の生産についての評論』は元々“Pamphleteer”(Vol. XVII, No. XXXIV, 2B, pp. 385—416)中の一論文であつた如く、マルサス宛公開書簡の形を取りながら「生産的」「不生産的」概念に關するマルサスの見解を評論せるものである。人口論を主題としてゐるわけではないが、末尾に注意すべき一節——「食物主義及び反人口主義學說」と題する——がある。人口の能働的な側面を依然として(一八二〇年)グレイはこゝでも

- 13) Grahame, An Inquiry into the Principle of Population, etc. Edinburgh 1816.
 14) Weyland, The Principles of Population and Production, etc. London 1816.

強調し續けてゐるのである。

さてこれより、以上の三著を典據としてグレイの人口論を描出してみる。但し原典は極度の稀覯本なる爲め、必要なる記述は出来るだけ詳しく譯出しておきたいと考へる。

四、「流通體」及びその需給の理論

人口理論を根幹とせる第一著『國家の幸福』は「幸福」の概念、及びその物質的對象たる「流通體」の理論を先行せしめてゐる。グレイによれば「國民の幸福、並びにそれを構成するすべての個人の幸福は、若干言に概括し得る。即ちそれは、肉體的並びに精神的な健康を享樂すること、飲み食ひする物や、氣候の變化から保護する物や、又爲すべき物を有することから成り立つ。然し全體を完成する爲めには、吾々は、友人に恵まれ且つ外敵から防衛されてゐること、を附け加へなければならぬ¹⁾。」そしてこの幸福を維持する爲めに必要な物資がグレイの謂ゆる“circuland”（流通體）に外ならぬのである。

「流通體は、それを用ふることによつて、増大するか若くは益々價值を發揮する。」そしてそれに携はる「流通者 (circulators) が増加するに比例して、これらの流通者が分有すべき平均量も亦、新たなる附加的比例におよびて増加する。」²⁾ これらが「最初の、普遍的原理 (first and universal principles)」である。

1) Happiness of States, p. 5.
2) Happiness of States, p. 25.

「各人は二つの方向において流通者である。第一には彼れの所得により、そして第二には彼れの用費によつて。彼れの労働、熟練、若くは資本によつて各人は、公共基金に近づくことが出来、又は他人に支拂を請求することが出来る。他方各人は労働、熟練、若くは資本を用費することにおいて他人を雇傭する、そして勿論、彼れに對する支拂の請求によつて、他人をして件の基金に近づかしめる。かくてこの兩方向で各人は、直接には第一方向により、間接には第二方向によつて、一國の富裕を増し加へるのである。」³⁾

然るに「流通體はその用役 (use) から、然り流通物としてのその存在は人間の欲望から、出で來たる。吾々がそれによつて流通者となるべき物品は、明確に類別し難い若干の雜多な例外を除いて一般に、人間を養ひ、着せ、住はせ、勤めさせ、統治し、教育し、娛樂せしめる物、及び病中に労働する場合に彼等を全快に努めさす工夫、の諸種目乃至は諸等級のもとに排列することが出来る。これらすべての種類の流通體は本質的に有用なるものであつて、人間の幸福を作り出し若くは促進する傾きがある。これらのものは、すべて同様に、個人としての並びに一集團としての兩様の流通者にとつての富裕の源泉である。」

「流通體は流通者に關して、後者と同様に、二大分類を構成するものと見ることが出来る。即ち所得流通體 (income circulant) と用費流通體 (expenditure circulant) がそれである。前者は一流通者をして他人に支拂を請求するを得せしめ、後者は他人をして彼れに請求するを得せしめる。それ故に、前者は彼れにとつての利潤の源泉であるに對して、後者は失費の源泉、即ち彼れが前者によつて獲たる利潤のうちから生活の必需品と便宜

3) Happiness of States, p. 47.

品とを購はんが爲めに多かれ少なかれ拂ひ戻すところの手段、である。然しながら一は個人に利潤を生ぜしめ他はそれを取り去るとはいへ、兩者ともその國民に利益を生ぜしめ、その富裕を増さしむる傾きがある。蓋し或る流通者から一時のあひだ取り去らるゝものは、取引において彼れと結び付きたる他の人の所得に附加せられるわけで、あらゆる階級の流通者を通じて一者に用費となるものは他者の所得となるからである。實際この用費そのものは結局のところ流通の進行中に流通者自身の所得を恒久的に増加せしむる傾きがある。⁴⁾

かくて、「流通體そのものの本質よりして、」とグレイは彼れの特有なる需要論へと進み入る——「需要は量を規制する。その限りで量は人間の意思に左右されるのである。如何なる物品も流通過程に持ち込まれ得る以上のものは何の用もない。流通され得ないものは利潤を生み出し得ない、而して實際、用ひられ得ないものは存在せざると同然であらう。

「實際上吾々は需要の規制力 (the regulating power of the demand) が、最も多く若くは最大多数者によつて用ひらるゝものから最も少く若くは最少數者によつて用ひらるゝものに至るまでの、何れの物品についても均しく作用しつゝあるのを見る。例へば、穀物を栽培する爲め若くは家畜を飼養する爲めに開發せられたる土地の面積は、穀物なり家畜なりに對する需要によつて規制せられる。蓋し若し、適當なる時期に適當なる價格で賣却し得る以上の穀物を産出するなり或ひは家畜を飼養したりするならば、その事から果して何の用役、何の利潤が生ずるであらうか？……利潤をあげるところか、彼等は彼等の時間と彼等の貨幣との双方を失ふであら

4) Happiness of States, p. 70.

う。過剰の量は實際、無益よりもなほ悪い。それは現實に需要せられてゐる量についてすら價格を低落せしめ、全體に損失を及ぼすであらう。

「需要は、それ故に必らず、何れの特定種目の流通體の量をも規制する、従つてむろん、それを生産し若くは準備する爲めに雇傭されたる労働者の數をも規制する。もしも何種かの物品、例へば帽子を生産するに際して、消費が要求する以上の多くの労働者がゐたとすれば、全部の労働者が充全なる雇傭を得能はざるか、さもなくば劣悪なる労働者中の或る者が全然雇傭を得能はざるかに至るであらう。この労働者の過剰が或る特定の物品に關して、國民全體中に、又、交易を通じてその國民と結びつきたる國々において存在したとすれば、全階級を通じて沈滞 (a languor) が生ずるであらう。賃銀は下落するだらうし、若干の労働者は不振の階級たることを悟り、こゝを去つて、より榮えたる階級に轉向するであらう。そして生産者と消費者との間の均衡が回復されるに至るまでは、この階級に育て上げらるゝ若い人々の數もより少くなるであらう。實際、この階級が不評判な階級となつてしまふことから、減少は續いてゆき、つひには現實の需要を充分にみたすにさへ足らなくなつてしまひ、かくてこの階級は再び雇傭の充分なる、得意の階級となるのである。然しながら、もしも労働者の過剰が一都市、一教區、乃至は一地方に限られてゐるならば、充分なる雇傭を見出し得ざる個々人は、附加的労働者が同一部門で要求されてゐる他の場所に移住しなければならぬ。

「供給と需要との間の一般的な、正確なる投合はこれによつて充分に説明せられた。規制原理 (the regulating

principle)は普遍的であり、且つ強大なる不斷の作用力を有するもので、それは本質的に利己心と結びつき、又屢々必要とさへも結び着いてゐるのである。……⁵⁾」

「需要についてのこの自然的規制作用はその結果において極めて有利で、社會の種々なる階層の幸福に役立つ。政府の側における何らの干渉もなしに、それは丁度必要なだけの國民大衆を雇傭し、そして彼等の生存と快適とに要求せられたる種々なる物品の充分なる供給を保證する。實際、供給者と消費者との間の偶發的な不均衡から、乃至は得意の理論的諸觀念から、干渉を加へんとする政府なり個々人なりの一切の試みは、一般に無様であるか、出來損ひであるかを證してをり、その大部分は善をなすよりもむしろ害を爲すものである。全體として、激しい一時的事情は干渉に驅り立てるやうではあるが、より良き策は分配を全然、需要と利己心の發動とに委ぬるにある。これらの事情から發出する諸悪は忍耐をもつて忍ばねばならない、さうすれば需要は結局において、種々なる様式と方向とで臨機應變に増減を行ひながら救治を遂げるであらう。⁶⁾」

需要に關する右一連の理説を、グレイは第二著においても再説し、⁷⁾次の通りに書き加へる。但しこゝでは「需要の規制力」が直ちに「人間の」、従つて「人口の規制力」に置きかへられてゐるのを注意したい。曰く、「これによつて、食物の量が、衣服、住宅、その他いかなる部門の流通體とも同様に、完全に人間の規制下に服してゐること、そしてこの状態が——もしもかゝる時期がいつかは到來せねばならぬものとするれば——水陸が必要なる量を充分に供給し得ざるに立ち到るまで、繼續するであらうことは明白である。

5) Happiness of States, pp. 78—79.

6) Happiness of States, pp. 81—82.

7) Gray versus Malthus, p. 69 ff.

「人口の規制力 (the regulating power of population) は、需要の作用下に、種目と量との双方に關して何處においても見られる。……」⁸⁾

これを確證しようとするが如くに、別の個所において第一著はいふ、

「農夫は、彼れの土壤の性質と氣候とがゆるす限り、彼れの隣人なり若くは市場を見出し得る地方なりにおいて需要せられてゐる食物の種類によつて、導かれる。もしも主たる需要が小麥にあるとすれば、彼れは彼れの注意を主として小麥の生産に向ける。パンに燕麥が用ひらるゝ地方にあつては、彼れは専らその燕麥の生産に従事するであらう。もし大麥がパンとして食べられてゐるか、或ひはもしそれがビールを作る爲めに彼れの隣人によつて大いに需要せられてゐるかするならば、彼れは彼れの注意を格別に大麥に向けるであらう。又彼れの土地が大都市の附近にあるか、或ひは人口の増加及びその結果たるすべての階級にわたつての富裕と奢侈との増大の爲めに肉類の需要が増加して來るのを見たとすれば、彼れはむろん、彼れの注意をより多く蔬菜類と家畜の飼養とに轉ずる。この最後の場合に、もしも彼れの父なり或ひはその同じ農圃——百英反と假定せよ——を會つて所有してゐた人が、二十年前に、いつもその中の約六十英反を小麥その他の穀物に振りあて、牧草用、乃至はクロバーやカブラ類の栽培用に四十英反しか取つておかなかつたとすれば、今や件の農夫は、需要の比率に適應して、後者の目的に五十五英反或ひはその内外の面積を用ひ、前者の目的には四十五英反しか用ひない。おそらくはしかし、多くの場合において、資本の増投、及び特に、より多くの家畜を飼養すること

8) Gray versus Malthus, p. 74.

から得られる肥料の増投によつて、彼れは四十五英反でもつて、彼れの先行者達が六十英反で獲てゐた以上の穀物を生産するであらう。

「かくの如くして農夫達は、彼等の先行者達によつて種々なる目的に用ひられた面積數による彼等の計算に助けられながら、及び彼等自身の經驗と支配的な需要に關する觀察とに基いて、供給を消費に適合する點で極度に正確となるのである。」⁹⁾かくて「吾々は食物に對する需要が耕作者の數を調節すること、及び耕作者は、理性に導かれ利己心に促がされて、何れの他の種類の流通者或ひは供給者の場合におけると同様に、完全に供給を需要に適合せしむることを見る。」¹⁰⁾

しかし人間が如上の意味における完全なる規制者であるのは決して初めからではなかつた。歴史の諸段階を経て徐々にさうなつたのだ、とグレイは論じ續ける。

「もしも狩獵者の状態が人間の元々の状態であつたとすれば、この種族は、自然によつて任意に若くは彼れの努力とは關係なしに生産せられたる實際の食物量——供給が需要を超過してゐない場合を假定して——によつて規制されるであらう。かゝる状態の下では人間が供給の規制者にあらざること、獅子、虎、若くは狼と少しも變らない。これらの野獸と同様に人間は全然、自然の氣紛れな供給に左右されてゐたのである。人間が次の段階に——但し未だ耕作者の段階には達しない——に上つて來ると、この中間的な段階において彼れは部分的に規制者となる。但し依然として不完全な程度である。といふのは、人間は或る程度まで彼れの保有する動

9) Happiness of States, p. 440.

10) Gray versus Malthus, p. 77.

物の數を規制し得たけれども、その動物の飼料たるや天然自然の生産物に左右されたからである。然しながら人間は、正規の耕作者となつた時に完全なる規制者となつた。自然の生産力の全體は、一切の人爲的刺戟物をもつて、人間の意思に服せしめられた。かくして家畜の供給する食料及びそれが必要とする飼料に關すると、乃至は人間の料理皿と胃の腑とに適したる他の種類の食物——但し魚類は除いて——に關するとを問はず、人間はその欲望の量だけ完全に供給を作り得たのであつて、家屋、衣服、その他の流通物の供給すべてみな同じである。¹¹⁾」

以上がグレイの「流通體」及びそれに關する需要供給についての理論である。この理論は今日の用語で簡單に特徴づけるならば、一般流通論乃至價格論上の謂ゆる「需給學說」の範疇に屬してゐることは明白である。むろんそこでの主問題は價值・價格の決定問題ではないけれども、欲望の増減従つて需要の増減がそのまま直ちに供給の増減に響いてゆき、供給の量はつねに需要の量に均衡化するものと見る限り、謂ゆる「流通體」の價值・價格の騰落、従つて「流通者」の獲得すべき利潤の騰落も亦、右の均衡化的乃至は均衡攪亂的な需要供給間の作用に介入し來ること、換言すれば價值・價格の決定は結局その時々と需要量と供給量との關係によつて定まるといふことは、グレイ自からすでに承認してゐたところ、若くは少くともグレイの所論から推論し得るところである。果して然りとすれば、グレイの所論は古典派諸學者に本來固有のものと思はるゝ「需給學說」

11) Gray versus Malthus, pp. 80—81.

から如何に異なる特色を有するものであるかといふ一般問題と並びて、『人口原理論』においては矢張りこの需給學說の遵奉者たることを表明してゐるところの當面の論敵マルサスと何故に鋭角的な意見の對立を生ずるに至つたかといふ特殊問題とが、讀者の念頭に浮び上つて來るに違ひない。

筆者はそれを後段において、グレイ所論の全般的反省のうちに論及したいと思ふが、人間社會における窮困の恒久的存在を説くものと見えたマルサスの理論がグレイの目に、いかに不條理なものと映つたであらうかは、すでに上掲の記述よりして明白であらう。食物が需要に比して不足ならば人間はその供給を増すのであり、反對に過剰ならば人間はその供給を調節しさへすればいゝのである。その過不足の期間中に——需給間の均衡攪亂中に——起り得る諸悪は、たとへ有るとしても、「忍耐をもつて忍び」さへすれば事は済むのである！グレイが「マルサス反對者」として登場し來たる根據の一つは極めて明瞭である。同時にこの反對者が「樂觀論者」——然り極端なる樂觀論者——の一人として現はれることもこゝで明瞭である。然し又、他面においてグレイが、流通過程の根柢に人間の「利己心」を見、この過程への政府の干渉を「無様であるか、出來損ひである」と喝破し去つて自由放任を最上の策と考へながら古典派傳來の自由主義思想の流れに棹してゐる點において、完全にマルサスと一致してゐることも興味なしとしない。「自由主義者」「功利主義者」の特徴づけは所詮、彼れをマルサスから區別せしむるを得ないのである。

今はこれだけの評註に止めて、いよいよグレイの人口理論へと進んでゆく。

五、人口原理論——マルサス説の批判

「人口の原理」と題せる『グレイ對マルサス』の第一編は劈頭に「グレイ氏」の人口理論の骨子を掲げてゐる。曰く、

「本著者〔グレイ氏〕の主要目的は、『國家の幸福』において、次の學説を樹立せんとするにある。即ち人口の増加は何ら過剰たらんとする傾向を有せず、それどころか人口の増加が益々急速となり、廣汎となればなるほど、それは必然に益々完全に人間の欲望に應じ、益々著大に雇傭と所得と富裕との平均額を増し、益々文明を完全ならしめ、かくてもちろん益々效果的に萬人の幸福を促進する、といふことこれである¹⁾」

何故であるか？ この問ひに答へるのが、グレイ自身の手でマルサス説と對照せしめながら自己の「根本思想」を述べる次の逐條的記述である。

1. 「人口の原理は食物、氣候、政府、等々と結びついたものとして、あらゆる事情の下において、人口は増加する傾向はあるが然し過剰に増加する傾向はない、といふことである。何故ならこの増加はそれ自身で人口の多様な欲望に充分に應ずるの力を運び來たるから。

2. 人口〔増加〕の自然的進歩は、時間にひきあはせると、何ら特定の比率に従つてゐない、却つてそれが置かれてゐる様々の事情によつて左右されてゐる。連結せる地方又は國々における食物にひきあはせると、そ

1) Gray versus Malthus, p. 4. 傍點原文.

れは一樣に食物〔増加〕の進歩を人口自體の進歩と殆んど同一ならしめてゐる。

3. 人口の量はかくして食物の量を完全に規制する。同様に衣服、住宅、その他意思に左右さるゝあらゆる種類の流通體をも規制する。

4. 食物の溢剩又は過度は産兒力減退的及び人口減退的作用を爲す。

5. 人口の増加は一樣に、流通者間に割當てられたる雇傭の平均量を増加せしめ、従つてむろん労働者に対する附加的需要を増加せしむる傾きがある。

6. 人口の増加はそれ故に、所得と富裕とを増加する一樣の傾向がある。しかもその増加たるや單に舊來の比率に従ふのではなく、いはゞ流通者の數が増加するにつれて増大するといふ新たなる且つ擴大されたる比例に従ふのである。

7. 人口の増加によつて生じたる疾病と害惡とは、主として奢侈若くは過食から、並びに裕福から出で來つたものである。²⁾」

右のうち第一項がグレイの謂ふところの「人口の原理」であることは、彼れが後に繰返して、「グレイ氏の人口の原理」とは「すべての普通の場合において人口は全體として増加する傾向はあるが、然し決して過剩に増加する傾向はないといふこと³⁾」であると述べ、更に又、「人口の原理は、人口主義學說 (the population theory) に従へば、明白に自然の學說である。人口はつねに、増加する傾向はあるが、過剩に増加する傾向はない。な

2) Gray versus Malthus, pp. 10—12.

3) Gray versus Malthus, p. 25.

ぜならば人口増加はそれ自身で、益々效果的に附加的欲望に應ずるの力を運び來るから⁴⁾」と説いてゐることによつて明かである。

これを土臺としてマルサス説に加へる細目的批評は次の通りである。

(a) マルサスが「すべての生物には、その生物の爲めに備へられたる營養を超えて増加せんとする不斷の傾向がある」といふたのに對して――

「この著者〔マルサス〕は、動物はその物の爲めに備へられたる營養よりも速かに増加せんとする傾向があるといふ意見をそこから引出して來た事實を、述べてゐない。彼れはそれを即座に與へられたものとして採つてゐる⁵⁾。」だが「確かに反對の意見が自然秩序の周知の精神や配劑に遙かに多く合致する。動物に生を與へたとき、自然はこれらの物を養ふことを眼中に置いてゐた筈である。食物なしに動物は生き得ないからだ。然り吾は、自然が、それに生を與へた動物の必要とするあらゆる種類の食物を、事實上供給したことを知つてゐる⁶⁾。」

「この問題で特に注意を拂ふべきことは、動物は彼等自身で食物の一部を形成すること、即ち海中に棲む大部分の動物種屬と陸上に棲む多くの動物種屬――人間を含めて――が、全然か或ひは部分的にか動物によつて生きてゐることである。それだから動物が益々急速に増加すればするほど、益々多く彼等は營養の量を増加するのである。」⁷⁾「大洋に轉じてみると、その廣茫たる地帯に繁殖してをる動物の大部分がお互ひ同士で生き合つて

4) Gray versus Malthus, p. 66. 傍點原文。
5) Gray versus Malthus, p. 26.
6) Gray versus Malthus, p. 27.
7) Gray versus Malthus, p. 28.

ゐることがわかる。それ故に、動物が増加すること速かなればなるほど、益々多くの食物を彼等は相互に供給し合ふのである。一般的にいふて、動物が事實上増加しつゝありや否やは、余の確言し得ざるところである。然しながら人間によつて彼等の上に加へらるゝ破壊の増大しつゝあるにも拘らず、彼等は少くとも、減少しつゝあるやうでもなければ、又食物に缺乏してゐるやうでもない。」

(b) 右に關聯して、マルサスの謂ゆる「人口の食物よりも速かに増加せんとする自然的傾向」に對して——「何處にこの證據があるか？ 地球上の如何なる地域にても選り検査せよ、然らば即ち、かゝる自然的傾向の存せざることを見出すであらう。大多數の地域及び國々の人口には、普通の時と普通の事情の下では、増加する傾向がある。そして食物は理性の指導と需要の規制との下で、人口自身の比率に應じて或ひは迅速に或ひは緩漫に、それと平行して増加せしめられる。衣服、住宅、その他、人口の必要とする物品すべて皆同じ。然しながら、理論家達の想像ではどういふことがあらうとも、人口は衣服や住宅、若くは他の何れの部門の流通體に關してもと同様に、食物に關して過剰に増加する、不斷の傾向といふ如き外觀は現實に存しない。」

(c) 人口は「幾何的比例」で、食物は「算術的比例」でといふに對して——「時間に関はらしめていふと、人口の増加には何ら自然的なる若くは固定せる比率は存しない。食物もそれ自身で何ら増加の自然的比率を有しない。自然の状態においては、食物の量は全く、溫暖に關する季節の特質によつて左右される、従つて地位を均らしていふとその額は、完全にとは云へなくとも殆んど靜止的であると云

8) Gray versus Malthus, pp. 28—29.

9) Gray versus Malthus, pp. 34—35. 傍點原文.

くる。

「食物の増加が可能となるのは、人間がやつと彼れの労働と熟練とを應用し始めてからのことである。それ故に、食物の増加はすべてみな人爲的である。それ自身では食物は總じて受け身である。増加の比率はかくて全然食物の上に刻印づけられたもの、然り實際強制せられたものであるので、その増大する比率の如何に拘らず、人間の仕業であつて、理性の指導の下にその欲求に應ぜんとして働きつゝある規制者としての人間によつて、食物に與へらるゝものなのである。それ故に食物はつねに、需要者達の増加の比率——それは急速であらうと緩漫であらうと、ほゞ人間の爲し得るだけの——に従つてゆくであらう。」¹⁰⁾

(d) 人口の二十五年倍加説に對して——

「この假定は全く不當である。刺戟的及び反作用的な事情を有する或る状態においては、これは「人口の」進歩の自然的比率であるだらうが、ほかでは何處でもさうではない。人口について進歩の自然的比率などといふ如きものが存してゐたとすれば、それは本來の自然状態の下にある人間、即ちおそらくは狩獵種族の増加比率であつたらう。けれどもこの状態の下における人口の増加比率は、よしんば最初のものであつたとしても、ただこの状態の下における人口の進歩比率たるに過ぎないで、牧畜種族、農耕民族、若くは商工國民、若くは多かれ少なかれこれらすべてを結合せる國民、の進歩比率ではないのである。それ故にかゝる固定の比率は存しない。人口の自然的進歩とは、その諸事情の全體から生じ來る増加である……」¹¹⁾

10) Gray versus Malthus, p. 51.

11) Gray versus Malthus, pp. 54—55. 傍點原文.

次いでグレイはマルサスにおける「妨げ」を攻撃するが、これは省略に附してもグレイの論構を妨げるには至るまい。たゞ、

(e) マルサスが人口増加の「究極の妨げ」を食物の缺乏に見たるに對して、グレイの加へる次の評言だけは見遁してならない。そこには、後に詳論すべき人口増加將來の豫想に對するグレイの特有なる見地と、一つの自然科學的法則への依據の着想とが現はれるからである。

「實際、人口の増加を妨げる作用を爲すものは、食物主義學說 (the subsistence theory) の想像する如く、食物の不足ではない。その影響は、熱暑の氣候の所で時々起る事實上の飢饉の場合を除いては、取るに足らぬものである。妨げとして強力なる作用を爲すものは食物の過多である。奢侈、乃至は暴飲暴食は、不胎的ならしめ、若くは出産の數を減少し、同様に又すでに生れたる者の生命を短縮する傾きがある。そしてこの有力なる作用は、人口が益々多數となるに比例して効力を増すやうである。¹²⁾」

以上がグレイの試みたるマルサス批判の細目である。マルサスの理論はこれによつて如何なる虚を衝かれようとしてゐるか、それは果してマルサスの伽藍を搖がすに足るものであるか、の反省は今こゝで筆者の立ち入り得る邊はない。その理論の性格よりしてグレイの最も重視するものと覺しきマルサス批判は實はこれから始まるのである。すでに序論的第二節で論及して置いた通り、人口理論上のグレイの立場は、人口對食物の關係

12) Gray versus Malthus, p. 65.

において前者を規制者、後者を被規制者と見ることに、従つてこの逆の關係を主張するものを「食物主義學說」又は「反人口主義學說」として斥けこれに對してグレイ自からその決定的代表者と考へたる「人口主義學說」を強調すること、にあつた。この根本的立場は、すでに上來の記述の中にも表明せられてはゐるが、グレイは進みてこの點を詳述しながら再びマルサスに向つて攻撃の刃を擬するのである。

六、人口の食物規制論——マルサス說批判の特論

グレイによれば、「食物主義學說」の現代の代表者はマルサスであるが、マルサスに基礎を與へたものはステュワートであつた。「サー・ジェームズ・ステュワートは食物主義學說の土臺を据ゑたやうである、然しマルサス氏はこの學說に現在の形態を與へた。」¹⁾又曰く「サー・ジェームズ・ステュワートは食物說原理の本來の著者であつたやうである、……むろん彼れはこの奇異なる原理を公けの注意と討論とに持ち來すことに成功しなかつたが。彼れは彼れの分析においてマルサス氏よりも遙かに綿密である。」²⁾と。かくてグレイはマルサスからその「食物主義學說」の獨創を剝奪したといふ如き勢ひをもつて、グレイ自身にとつては本格的なマルサス批判に進み入る。それは次の通りである。

「マルサス氏は明かに、人口に對する食物の完全なる規制力、或ひは彼れ自身の言葉をもつてすれば『前者』人

1) Gray versus Malthus, preface, p. iii.

2) Gray versus Malthus, p. 112.

口」をば後者「食物」の水準にまで引き抑へる』の力、を「食物に」歸屬せしめてゐる。これは即ち、食物の場合において供給が需要を規制するといふことである。蓋し食物は人口に關しては供給であり、人口の欲望は需要を形成するから。³⁾」

「然らば、検討下に置かれたる主題の關する限り、この「マルサスの」統計的研究の結果はどうであるか？

余はこゝでは問題を食物に限定する。雇傭及び富裕に關する問題は、後に詳細に論じたい。吾々が右の研究から學ぶところのすべては、人口と食物とは殆んど相互の水準で保ち合ふといふことだ。この事實を確證する爲めには、家屋、衣服等が人口と水準を保つてゐたことを發見する爲めと同様に、古代諸國若くは近代諸國の何れかにも遍歴を行ふ必要はなかつた。彼れ「マルサス」はこの目的の關する限りでは、内に留まつてゐてもよかつた、それで目的は充分に達せられたであらう。自然の大法則即ち需要の普遍的規制力 (the universally regulating power of the demand) よりして、この均衡は必然に、開發されたる状態の一切の國々——古代のものたると近代のものたるとを問はず、人口が稀薄なると稠密なるとを問はず——における平均的結果であらねばならない。……

「地球についての研究の結果はかうである。即ち地球上の一切の地帯——けだし數百年と云はず實に數千年を經過した後では如何なる廣さの地帯も除外され得るものは一つもないので——を通じて、人口が生産可能なる食物の限度に少しでも近付いたといふ如き地帯は見出されてゐない、といふことである。然りとすれば、人口

3) Gray versus Malthus, p. 82.

の進歩を妨げたものが食物の一般的不足であるとは如何にして可能であるか？ 議論は簡潔だ、だがそれは完全に決定的である。⁴⁾」

然るにもしもマルサスが、人口は必ず食物によつて制限されるといふ「結論をもつて、たゞ人口を養ふべき食物の充分なる量があらねばならぬことを意味せしめてゐるだけならば、この利口ぶつた學説はたゞ承認すべしと述ぶべきに過ぎざる自明のことである。然しながらもこの結論が、有りさうなことだが、食物の事實上の量が人口の事實上の高さを制限し又は規制することを確言しようと意圖されてゐるとすれば、これはたゞ人口の或る状態、例へば人間が耕作者となる以前の狩獵者の状態、若くは事實上の飢饉の下に働きつゝある或る國民の状態、若くは地球の事實上の人口がもはやそれを超えては如何なる附加者をも養ひ得ないといふ一點に到達せる如き場合、についてのみ確言し得るに過ぎない。序でながらこの最後の場合は、普遍的且つ不斷の飢饉の状態と考へていゝもので、これこそは食物説が人間のいつもの状態であると想像してをるものに幾らか似たる状態であるだらう。然しながら、人間が耕作者であり、しかもまだ定員には達してをらず、そして若干の些細なる例外を除いてはそれが地球の全地方を包含してをる、といふが如き地帯に關しては、推論は誤りである。人口は生存の資料によつても、又衣服、住居の資料によつても制限されない。實際、右の結論は自然の結果を逆さにして、結果をもつて原因としたものである。これらすべての國々においては食物の増加は必然に人口の増加によつて制限せられる。規制力は後者の手中にある。食物の増加は需要によつて指導せられるもの

4) Gray versus Malthus, pp. 87-88.

であり、しかもこの需要は人口の欲望から成り立つものである。かくてこの規制は全體として人間の意思と同様に完全であつて、その眞唯中に發動すべき多種多様の事情に助けられ若くは反作用を與へられながらこの規制を作り得るのである。⁵⁾」

「もしも世界がつひにその定員に達して體制が續くものとすれば、マルサス氏が何の根據もなく現在存すると想像するものが起るであらう。人口は食物の額によつて妨げられるであらう、蓋し人間の意思はその規制力を失ふてしまふであらうから。需要が供給を規制するといふ自然法則は、かくてこの場合、覆へされるであらう。そして何か賢明なる抑制が採用されるのでなければ、結果は、その最惡の形態における普遍的窮困といふ恐るべきものであらねばならない。⁶⁾」

「然しながら全體として、余は」とグレイは論じ續ける——「かの『國家の幸福』の著者の意見、即ち人口の増加はそれ自身のうちに一般的過剩に對する完全なる矯正作用を含むものであり、従つて人口は決して一般的にその全き定員に達しないだらう、といふ意見が確からしいと思はざるを得ない。自然が、人口増加に對する産兒力減退的、並びに他の反作用的影響に賦與したところの傾向が、人口の増加するにつれてこの推測を確證するやうに見える。窮困に向はんとする過度を妨げようとする如上の様式は自然の普通の諸様式に、より多く合致するものである。⁷⁾」

かくてグレイはこの點に關するマルサス批判、従つて自説の要旨を記して曰く、

5) Gray versus Malthus, pp. 90—91.
6) Gray versus Malthus, p. 162.
7) Gray versus Malthus, p. 164. 傍點原文.

「これを要約すれば、次の諸點が明白である。即ち規制力は食物に關してと同時に人間によつて準備せらるゝ他の何れの供給に關しても、完全に人間の所有に屬してゐること、食物は結婚の數を規制するにそれ自身に特有なる、若くは他の種類の流通體と共有せざる、何らの作用をも有せざること、全體として、人口量と食物量との間には人口と住宅との間、人口と衣服との間、等におけると同様に均衡が存するといふこと、食物の量は全然、耕作に従事せる労働者の數によつて規制せらるゝものであり、しかもこの労働者の數はすべての他の場合におけると同様に人口の需要によつて調整せらるゝものであり、従つて食物は需要せられたる如何なる量においても供給され得るものであること、人口は食物の豊富に従つて急速に増加するどころか實は食物の過多によつて妨げられ、そして生活態度が益々節約的となり且つむしろ缺乏状態に接近するに比例して一層急速に増加するものであること、一地方における人口の量は決してその地方に生産せらるゝ食物の量によつて規制せらるゝものでないこと、人口はたしかにそれ自身の中に矯正的作用力を含むもので、この作用力は人口が一層濃密となるにつれて一層強大となりながら、いつかその全き定員に達するといふ如きことを妨げるであらうこと、だが然し最後に、いつかはその定員に達せねばならぬにしてもかゝる状態に達するまでは、規制力はグレイ氏の主張する如く人口にあらねばならず、マルサス氏の想像する如く食物にあつてはならないといふこと、これである。」⁸⁾

——右は「グレイ氏の確言する如く人口が食物を規制するか、そも又マルサス氏の主張する如く食物が人口

8) Gray versus Malthus, pp. 165—166.

を規制するか？」と題せる第二著第二編の結論でもある。グレイの所見は、これ以上いかほど多くの引用を附け加へるとも右に表現せられたるところ以上には出で得ない。たゞ筆者は更に次節において紹介すべきグレイの人口増加結果論につながりを附ける意味を含めて、老なる第一著『國家の幸福』より次の一節を引くことにしよう。即ちこの著の第六編第三章は「人口が食物を規制するか、そも又食物が人口を規制するか？」と題されてゐるが、その結論はかうである。

「諸事情のこの分析よりして自然における事實は明白に次の如く樹立せられてゐる。即ち人口が食物を規制し、食物が人口を規制するのではないこと、食物の進歩は偶発的な不規則は例外として、人口の進歩によつて及びその人口の熟練と勤勉とによつて惹き起されること、換言すれば食物の増加率を規制するものは、緩急いづれたるを問はず人口の増加率であること、これである。反ポピュレイションニストとともにこの逆を想像するは完全に事柄を見誤るものである。それは原因をして結果をではなく、結果をして原因を規制せしめることである。人口の増加は原因であり、食物の増加はこの原因によつて作り出されたる結果である。人口は食物を、少くとも人口自身と等しい率で、しかし一般にはこれよりも高い率で、推し進めてゆく。だが食物は、もし何かの事情に基いて常ならず人口の普通の率を超えることがあるとしても、漸次後者に低下するであらう。

「この事よりして、それらの場所において注意せらるべき多くの愉快なる且つ興味ある結論が出で來たる。ここでは右のことから推論せられたる重要な政治的一眞理を述べるのが至當であらう。即ち附加的に耕作を進

めてゆく爲めには、内地においてか或ひは諸君がそれと取引を行うてゐる海外の地方においてか、その何れかにおいて人口を——換言すれば消費者を——増加することが必要である。⁹⁾」

人口の増加をそのまま直ちに需要の増加、従つて供給の増加、従つて又國民富裕の増大と考へることから、人口の増加を謳歌せんとする典型的なるポピュレイションニストとしてのグレイの立場はすでに明瞭である。全體的評價はなほこれを後にゆづりながら、更に進みてグレイの人口増加作用論、及び次いで将来の豫想觀を紹述するであらう。

七、人口増加の作用論

人口の増加は先づ何故に富裕の増大となるか？ グレイはその第一著の初めに展開したる需要理論に關聯せしめて、この問ひに次の通りに答へてゆく。

「人口稠密なることの、及び増加しゆく人口の致富的作用、若くは所得の平均額を増加せんとするこれらのものの傾向は、たゞに異なる國々を比較することによつてのみならず、同じ國の異なる地方を比較することによつても見られる。人口稀薄なる地方は、若干の格別なる事情にある場合は除いて、普通は人口のより稠密なる地方よりもより貧困である。都市人口の大衆も亦田舎の大衆よりは富んでゐる、或ひは所得のより大きい額を

9) Happiness of States, pp. 445—446.

分け合つてゐる。かくて、他の事情にしてほしい限り、ある都市の人口が他の都市のそれよりもより稠密であることに比例して、前者の人口はより多く富んでゐるのである。……

「約言すれば、人口の増加は、よしんば賣手の増加にならうとも、買手の増加である。従つてこの本質よりして人口の増加は、多様な流通者の間における購買の能力を減ずる方向に向ふ代りに、大衆の間におけるその能力を増加することに有力に作用する。流通體を使用することは、それを減少せしめたり或ひは總額から控除したりするどころか、斷えず累進的比率でこの總額に添加してゆく。

「かくして一般に、人口の各々の増加が全體によつて分たれたる所得の平均額を増加するに傾くことは眞實である。然しこれは、人口の各々の均等の増加が流通體又は富裕の均等の増加を生ぜしむることを確言してゐるのではない。後者の増加率は人口の性格と特殊の諸事情、並びにこれらのものが交互的に與へ合ふところの刺戟の量、によつて著しく左右されるものであるので、この率は無數の變化を容認する。……」¹⁾

「人口の多寡に従つて一國の富の比例に大小のあることが見出されるであらう。蓋し、吾々の見たやうに、流通者數における増大の自然的傾向は、流通體の平均量又は彼等之間に課する手段を、増加するにあるからである。但しこのことは、一國民の自然的事情と性格とが右の量を規制する點で一大作用を爲すものと確言してゐるのではない。

「人口の點では他の國民の半分又は三分の一にしか達しないで、しかも、自然的又は生得的な諸利益及び住民

1) Happiness of States, pp. 31—33.

のより勝れたる活動力と勤勉との爲めに、富の點ではより大なる比例を有するといふ如き若干の國民はある。だが然し、同一の事情にあり且つ同一の性格を有しながら、たゞ人口の點でのみ異なつてゐる如き二つの國民を假定せよ。人口數のより大なる國民においては一樣に富者の比例がより大であり、かくて人口の増加が急速となればなるほど、これらの富裕なる個々人の増加は益々急速となるであらう。その人口の時期を異にする同一國民についても事柄は同じである。それが僅かに四百萬人しか包容してゐない時には、六百萬人にのぼつてゐる時に比して、富者は比例的により少數であらう。又それが八百萬人に達してゐる時には、前に六百萬人であつた時よりも——比率の増大に従うて——富者はなほ一層大なる比例を占めるであらう。例解の爲めに多數の例から一つを引いて來ると、國民數が四百萬人しかなかつた時には、その國民中の相當の商人又は銀行家の年々の所得が例へば年千二百磅を超えないであらう。従つて彼等は彼等の主任番頭に年百五十磅以上を與へることが出来ない。「然るに」八百萬人の時には、これらの階級が以前の比例に従ふよりもより多數となるばかりでなく、これらの人々の平均的年所得も年三千磅又は四千磅に上り、従つて彼等は彼等の主任番頭に年四百磅又は五百磅を與へる、といふ風に人口の増加に従うて、増大しゆく比例で進行するであらう。この後の時期においては、商人及び銀行家の主たる番頭達から成り立つところの新たなる一富裕階級が現はれる。その他の新たなる富裕階級も掲げてよからう。これらの階級はその先行者達の如く、より安價なる愉樂に自らを拘束することの代りに、少しは奢侈に身を委ねることが出來、かくて彼等は流通體の量を、或ひは附加的所得の手段を、

増大せしむることに助成するのである。要するに、人口の増加は、富の生産に及ぼすその影響がたゞ餘りにも看過せられて来たとはいへ、富の恒久的増加の大なる、實際唯一の、本來的原因である。²⁾

然らば人口の増加は、マルサスの注意せる如くに貧困と結びつく事實はないか、殊に十九世紀初頭のイギリスの状態はどうであつたか？ グレイは社會大衆の貧困の事實に必ずしも目を蔽うてゐない。しかしその説明するところはかうである。

「人口の増加は必然に流通體の新種目を創造し、そしてむろん富裕の源泉に附加する傾向があるので、一般的結果は全體として富裕の増大であらう。然しながら流通體のこれらの新種目が人間を据ゑつけるところの地位の變化の増大は、より多くの流通者を失敗の危険にさらすであらう。取引者の慎重さにも拘らず、なほかつ、單なる移轉事件のより大なる變化が生ずるであらう。流通者間における性格の自然的相違——それは種々異なつた生れつきの性向と人間の心情における元々の不等とに由來するもので、本質的には變へることが出來ない——を考慮に入れるならば、吾々は多數者の間における不謹慎と、そして勿論そのすべての結果とを豫期しなければならぬ。これらの生れつきの性向や元々の不等は疑ひもなく、全體としては大いに、社會の幸福を促進する傾きがある、然しそれは偶發的な諸惡をも作り出すのである。もしもイギリスが人口と富裕との増加を續けてゆくとすれば、不運な人々と不身持ちな貧民との兩者を扶養するの負擔が増加してゆくことを豫期しなければならぬ。吾々はこの惡を部分的に抑止することは出來る、だがこれを取り除くことは決して出來な

2) Happiness of States, pp. 124—125.

——いかに忍耐強き讀者を本稿の筆者は初めから「豫期」しつゝあつたにしても、こゝで一言の評註をグレイの所論に加へざるを得ない。グレイの眼前には「不幸」と「貧困」とは確かにあつた。然しこの事實は彼れの目にはたゞ、「慎重さ」の缺如として、「不身持ち」の結果としてのみ映つたのである。古典派諸學者に共通したる根本性格の一つとしての、多かれ少なかれ社會體制への洞察の缺如を、グレイは右の一文において最も露骨に表はしてゐる。同時に又、かゝる意味における「諸惡」の根絶を絶望視してゐる點においてグレイは、後代の學說史家が彼れに冠する「樂觀論者」といふ名稱におよそ正反對の態度を表明してゐるのである。それはともあれ、グレイは右一文を記し込みたる第二著第四編——「人口は増加する場合所得と富との平均額を増す傾きがあるか、それとも減する傾きがあるか？」と題せる——を次の記述をもつて結んでゐる。

「要約すれば、人口の増加は大衆の欲望を増大し加倍することによつて、富裕の舊源泉を擴大し、新源泉を創造し、以つてこの大衆をして彼等の欲する物を益々豊かに獲得するを得せしめる。それは新たなる諸階級を作り出し、かくて斷えず平均的需要を擴大してゆく。それは漸次に價格の一般率を、即ち事實上、種々なる階級の所得を高める。人口の増加から生ずるところの富裕の増加は、たゞに個人當りの舊比率に従ふのではなく、實は、人口が益々密集しそして人數の増加が益々急速となるにつれて益々膨脹しゆくが如くに見える比例に従うて増大を續けるのである。他方において、人口の減少は必ず、流通體的力への刺戟を減することによつて沈滞

3) Gray versus Malthus, pp. 266—267.

(a depression)を惹き起し、そして貧困を作り出す。すべて自然的たると人爲的たるとを問はず、およそ人口の蓄積 (the accumulation of population) を妨ぐる傾きのある事情は一樣に——それが効果的たるを示す限りは——富裕の進歩を妨ぐる傾きがある。……

「この論題についての『國家の幸福』の二つの根本學説は、かくて次の如く明白に樹立されてゐる。即ち一、『人口の増加は富裕の恒久的増加の大なる、實際唯一の本來的原因である』こと、而して二、『流通者の數における各々の増加は富裕を増す傾きがある、しかもその増加たるや單に以前の分配分の平均量に従ふだけではない、新たなる人數に比例して増大したる新たなる平均量にも従ふのである。』後者は實際の流通中における前者の現實的結果である。人口の増加における富裕増大的作用はかくて一つの明白なる自然原理 (a clear principle of nature) である。」⁴⁾

一八二〇年の第三著、即ちマルサスに宛てたる公開書簡において、グレイは依然としてこの點を力調してゐる。併せ見るべき資料として、「食物主義及び反人口主義學説」と題せるその一節を左に譯出しておかう。曰く、「私が貴下〔マルサスを指す〕の注意を仰ぎたいと思ふのは、事實が一樣に次のことを示してをることである。即ち自然の大法則たる供給に對する需要の規制力は、供給の如何なる他の部門に對すると同様に完全に食物に及んでゐること、人口は食物よりも速かに増加する自然的傾向を有するどころか實は、過去四千年にわたつてその増加は後者〔食物〕が増加せしめられ得た比率に少しも近づかず、おそらく四二〇對三〇ぐらゐにも

4) Gray versus Malthus, pp. 281—282. 傍點原文.



達しなかつたといふこと、更に人口にはかゝる傾向が存せざることの證據として、未だ開墾されざる土地又は耕作を誤まつてをる土地において附加的食物を供給する爲めの豊富なる資料が到るところに存してをり、また食物の供給者の自然的不足が存することからではなく、耕作方面における雇傭の缺乏から田舎より都市に向つての普遍的且つ不斷の人々の移住が行はれてゐること、「引用者曰く、こゝでは明かに農村における雇傭に比しての人口の過剰を承認し、自らは意識することなしに、雇傭に對しての人口過剰は生ぜずといふ一般的命題との矛盾に、グレイは陥つてゐる！」及び食物供給の決定的確認として、平均して全く需要と平衡を保つてゐたので、その價格が平均して公平であつたこと、即ち平均率を中心に騰落相半ばしてゐたこと、これである。「雇傭と富裕とに關しては、事實は一樣に次のことを證明するに合致してゐる。即ち人口の増加は、雇傭を減じ貧困を産むの傾向を有するどころか、雇傭と富裕との一切の恒久的増加の大源泉であること、一都市、一地方或ひは一國は、他の事情にして等しき限り、人口が稠密なればなるほど一樣に、益々不斷に雇傭せられ且つより富裕であり、そして以前の比率で計算してみても種々異なる人數よりもより高き程度で保證するであらうこと、人口が急速に増加すればするほど雇傭と富裕との増加は益々急速となるに反し、人口の靜止状態は斷えず不況と低價格とを隨伴し、又人口が減退する場合には斷えず雇傭手段と富裕との減少、並びに商業的企業の破滅的衰微が現はれること、更に、人口の最も稠密なる状態において屢々見出さるゝ貧困の増加は、住民稀薄なる國々において非常に普遍的なる貧困の如く雇傭手段の不足から發出するのではなくて、實は富裕の産み出し

勝ちな不身持ちと不謹慎な習慣から發出し、及び又かゝる状態の下では青年の大部分が、本来、最も豊富なる雇傭が存する状態の下にあつてさへ人生の成功を確保するに必要なべき謹直な、節約的な、蓄積的な習慣の形成を示さんが爲めのものとして、非常に早くから就職し且つ酬はるゝところ非常に豊富であることから發出すること、これである。

「もしもこれらの論點が事實に基礎づけられてゐるとすれば——而して確かにその通り基礎づけられてゐるとの外觀を有してゐるが——食物主義學説及び反人口主義の獨斷は自然の配合原理 (the principle of Nature's arrangements) に矛盾するものである。これらの學説はそれ故に、人口の稠密なることが貧困化的結果を來すとといふことに關する貴下〔マルサス〕の人口原理なり若くはアアサー・ヤング、シスモンディ、その他の學説が承認され得る前に、保證し難きものとならざるを得ない。だが然し、私の知る限りでは、いまの大問題に關する最決定的なる作用にも拘らず、右の諸點は未だ曾つて貴下によつても、又富裕増大化的作用を否定する何れの他の著者によつても、明確に考察されたことのなきもので、この作用こそ私が人口の増加と本質的に結びつける所以を示さうと努めたのである。⁵⁾」

——同じ論旨を幾度びも反復しつゝあるやうに見えるが、以上の諸論述はすべて、雇傭と所得、従つて國民富裕に及ぼす人口増加の好影響に集中されてゐる。然し人口増加の好影響は、グレイにとつては、決して右の側面にのみ限定されるものではなかつた。それは更に、人間精神をも改善し、實にあらゆる文明進歩の根本源

5) Remarks on the Production of Wealth (in a letter to Malthus), pp. 31—32.
傍點原文.

泉であると考へられてゐた。第一著の第四編はそれを次の通りに説いてゐる。

「人口の増加は土壤の開墾を擴大し、改良し、そして人間をして氣候の變化に左右さるゝことを益々少なからしめる。消費者の數並びに彼等の流通體の平均額を増大することによつて、人口の増加は需要を擴大し、同時にその需要に應ずるの力を益々多く彼等に賦與する。……」⁶⁾

「人口の増加は、その上に人口の居住する土壤とひとしく人口の心情を開拓し、改善するの傾きがある。それは肥沃的作用を有すると同様に強力なる、自然的な文明的作用を有してゐる。この文明化的傾向は、それが産み出す流通體の増加から起り、又人間を益々大衆に結合することから起るのである。」かくて「人口の増加は文明を増大する正規の大原因である。」⁷⁾

こゝからグレイは數頁にわたり、西洋文明の進歩が古代から如何に人口の増加と關聯して行はれたかを叙述する。そして曰く、

「約言すれば、人口の恒久的増加は文明の恒久的大源泉である。地方における或る特殊なる事情は、實際、それと共働したり或ひはそれに反作用を與へたりする、然しそれは根本的な且つ指導的な原因である。すべての時代及びすべての國々における人口の歴史は、それが増加的なりしと、靜止的なりしと、將た又減退的なりしとを問はず一様に、領土と比してのその率、及び増加・靜止・若くは減退に關してのその状態が、文明の規制者であることを證明してゐる。」⁸⁾

6) Happiness of States, pp. 321—322.
7) Happiness of States, pp. 323, 324.
8) Happiness of States, pp. 333—334.

八、人口増加の反作用と將來觀

五四

以上の人口増加作用論に關聯して興味あるグレイの記述は、人口増加將來の豫想に關するものである。人口の増加がもしもたゞ一方的にのみ、即ち所得と富裕とに、従つて又全文明の進歩に好影響をのみ與ふるものであるとし、それ故にこそ人口の増加を熱狂的に謳歌するものであつたならば、グレイの所論は、ともかくも首尾一貫したであらう代りに、かのマルサス以前の單純なる重商主義的ポピュレイションニストと全く相分たざるに至つたであらう。グレイは然し、富裕の増加はやがて「奢侈」を促し、或ひは又彼れの謂ゆる「過食」と「不節制」とを促し、これによつて人口の増加はその勢ひを「妨げ」られるであらうことを考へた。このことはすでに上來の記述のうちにも間々散見せられたところであるが、以下、別の個所よりその主要論點を拾ひ集めて、人口増加の好影響の反面及び將來の豫想に關するグレイの所見を描出することにしよう。

グレイは先づ人口増加の好影響を説いた直後に、「人口の増加は、然しながら、自然的に奢侈を増す傾きがあり、従つて暴飲暴食と適當なる運動量の缺乏とから發出する諸惡を増す傾きがある。」¹⁾と注意してゐるが、それを補ふ詳細の論述は次の如きものである。

「今日では多分、生産することの出来る限りといふ食物の限度まで人口が繁殖してゐる如き國は一つもあるまい。地球上の莫大なる部分はまだ殆んど人間が住んでゐないし、残りの部分は、それが扶養し得る人口の八分

1) Happiness of States, p. 334.

の一までしか繁殖してゐない。それ故に吾々は、かつては、往時の奢侈的並びに不生産的な諸國によつて失ひつゝあつたかも知れないものを、新たなる農業的並びに生産的諸國を以つて補給してゐたわけである。然しながら、いつの日にか、地球上の隅々にまで人間が繁殖し、かくて舊國を援助すべき新國もなく、一切の國が奢侈的となつて産兒力なき大都市が充滿する、といふ如き時が到來するとしても、人口はおそらく増加を止むるに違ひない。他方において、その一般の不健康な且つ不生産的な状態よりして、人口はその現状を保持することすら出来ないで、おそらくは何代もの間急速に減少し、かくてつひにその減縮せる状態から以前の如き増加の新手段が發出するといふことにならう。

「自然的に人口に反作用を與へる傾きのある大原因は、奢侈及び不健康な職業であつて、これらが人類の生殖力を減ぜしめ、又天壽を短縮するに傾くのである。これらの原因は主として大都市に存し、若くは大都市から出で來たる。それ故に一般的にいふならば、また増減の偶然的諸原因がいま比較されてをる場合々々についてほど相似たるものであることを假定するならば、増加〔一國人口の〕——もし有りとすれば——が規制されるのは、一國における大都市の人口が田舎の人口に對して有する比例によるのである。都市人口の田舎人口に對する比例が小なるときは、奢侈の普及と破壊性とはむろんより少いので、然る場合増加は急速である。前者の後者に對する比例がより大となるにつれて、増加はより緩漫となり、かくてある比例點を経過せる後は、おそらく人口を現在の水準で維持することすら困難となる時が到來するのである。

「規則的及び偶發的の人口減退化的諸原因は、吾々が現在イギリス、フランス、その他大部分のヨーロッパ諸國で見ると如き、人口の中年期においてすら非常に強力である。従つて、よしんばこれらの諸原因が規則的並びに偶發的の人口増加的諸原因と相匹敵し難いものであるとはいへ、人口のより著しく前進せる一國においてはそれらが充分に匹敵するものとなることは、容易に認め得るところである。人口の本性よりして、その増加的諸原因は、人口が領土に關してそれ自身増加するにつれて——少くとも或る一點を過ぎてからは——その勢力を減じてゆくに反し、人口減退化的諸原因は漸次に増してゆく。それ故に余は、人口はその進歩において無際限ではなからう、と考ふることに強く傾いてゐる。生存資料における何かの缺陷を豫想することなしに次の事柄、即ち地球が定員人口といふ如きものに逢着する遙か以前に、人口減退化的諸原因が人口増加的諸原因を相殺して餘りあることとなり、かくて一般的人口を再び或る一點まで減ぜしめてゆくであらうこと、は極めて確實であると思はれる。」

——讀んでこゝに到り、ひそかに想ひを百年後の、然り現代のヨーロッパ諸國に馳せ寄する人があるならば、グレイの觀察と洞見との如何に肯綮に當つてゐたかを承認せざるを得まい。たゞにその將來の豫想が適中したばかりではない、形においてはなほ全く素朴なる域を脱してゐないとはいへ、グレイはすでに、福祉と文明との有する人口減退化的作用を洞察するによつて、こゝに現代的人口理論の一つ——福祉學說——に一先鞭を着けてゐるのである。この意味よりしても、筆者はなほ若干の引用を續けて、上掲のグレイの所論を補はし

2) Happiness of States, pp. 352—353.

むる必要があると考へる。

都市の不生産性についてグレイは更に次の如く説明する。

「都市人口が田舎人口よりも、いつ、より少く生産的且つ健康的となるかは、數で決めること容易でない。蓋しこれは特殊なる諸事情によつて決定されるからである。すべての大都市は、他の事情にしてひどい限り、必然に田舎人口よりもより多く不生産的且つ不健康的である。といふのは大都市の氣候は悪く、奢侈は繁茂し、又坐職の職業や雇傭やが一般的であるから。然しながら都市の不健康は、その住民の現行の職業の性質並びに都市の場所によつて増減する。雇傭が主として室内のもの、坐職的なもの、若くは非衛生的な空氣を醸し出す材料の中であるものである場合、又これらの雇傭によつて得られる高賃銀が住民を誘うて過度の食事や心身消耗的な奢侈やに耽らしむる場合、更にこれに加ふるに、都市の場所がそれ自身で健康や活力に有害である場合には、生産的力並びに生産精力は根柢的に害せられる。而して人口は、もし規則的に田舎よりする新鮮な補給によつて支援されるのでなければ、増加するどころか却つて急速に減少するであらう。以上と反對の種類雇傭、生活様式及び場所は、むしろ大都市の産兒減退的及び不健康な影響に反作用を興へるに傾くであらう。」³⁾

次に然らば、都市生活と奢侈に隨伴する「過食」は何故に人口減退的作用を爲すのであるか？ 一見して、おそらくは最も奇異なものと感じらるゝであらうところの、グレイの過食減人口論は、マルサスの命題を逆に

3) Happiness of States, p. 366.

したものとして次の如く述べられるのである。

「食物の一定量は健康と生殖とに必要である。然しこれは、すでに見た通り、ぎりぎりの生存を維持するに必要な程度の量以上ではない。夫婦がこの程度以上に飲み食ひするに比例して、彼等は諸病の種を蒔き、そして彼等の生殖力を減ずる。この證據に、單なる必要量以上には殆んど出でない程度の生活をしてをる各國の下層階級は贅澤品や奢侈品を消費してをる階級よりも、より健康で、より長壽を保ち、そしてより多くの子供を産んでゐる。……」

「下層階級の勝れたる健康は非常に顯著でもあり、周く承認されてゐることでもあるので、例證を擧げる必要は全くなからう。實際、生活上の一般的事實として次のことは確言されていゝ。即ち階級が食事の點で單なるパンと水とに接近してゆくに比例して、その階級はより多く健康的であり、又階級が高まりゆくに比例してそれは益々少く健康的となり、かくてつひに最高の階級に達する。この最高階級では奢侈の爲めに生存が何かの種類の種類はしさの一連續たらしめられてをり、又こゝでは眞實の健康、心の健康のたつた一時間たりとも享有するものは少く、酒を飲むときか或ひは何か法外な幸運の事件でも持ち上つたときでなければ、灼熱の精神を持つといふ如き人物は滅多にゐないのである。

「又、餘り注意されないことだが、種々なる階級が、主としてパンと水とに頼つた生活程度に接近するにつれて、より多く多産的となるといふことは眞實でないのではない。諸階級がこの程度から昇るにつれて、生産力

「生殖力」は減ぜられてゐる。吾々はたゞ吾々の隣人達の間を眺め渡すだけでいい。そうすれば、階級がより多く贅澤な暮らしを爲してをるにつれて子供の數がかなり一樣に減じてゆくのがわかるに違ひない。即ち、主としてパンと野菜と水とで暮らしをる人間の子供數十人乃至十四人又はそれ以上から始まつて、よい暮らしをしてをる職人での三人乃至六人に至り、そして更に進みては高級の紳士や貴族での一人乃至三人に至つてゐる。特殊な諸事情から起る多くの例外は何れの階級にもあるが、然し何れの階級の子供の平均數も、その階級が食事の點で最低必要物に接近するに比例して大小が定まつてゐるやうである。⁴⁾

「これらの事實——それは一切の他の國々、又國々の一切の地方についても、その人口と食物とが比較されるときに得らるゝ事實と一致する——は、人口が増加するのは食物の豊富に従ふのではなく、實は或る點までは逆であることを表示してゐる。普遍的經驗に照らしてみても自然の事實はかうである。即ち人口の増加は、最低の必要物に事缺かぬ點までは、ほど使用されたる食物量との逆比例にあるといふこと。一定數の人民が平均して消費するところ少なければ少ないほど、彼等は平均して益々速かに増殖し、又これと逆に一定數の人民が消費するところ多ければ多いほど、彼等はより緩漫に増殖する。⁵⁾

——こゝより轉じてグレイは死亡率に及ぼす「過食」の影響を詳論して曰く、

「それ故に、もしも人口稠密なる國々において、人數より生ずる比例以上に多くの子供が死ぬとすれば、それはより大なる食物の缺乏に基くのではなくて、實はそこでは食物がより豊かであり又より豊かに消費されるの

4) Happiness of States, pp. 447—448.

5) Happiness of States, pp. 454—455. 傍點原文.

で、部分的には食物のより大なる豊富に基くのである。この増加せる死亡率の由つて來るところは、かゝる國においては非常に多くの両親が暴飲暴食に耽り、又より不健康な職業に従事し、従つて又、より柔弱又は病質的なる體質をその子供に遺傳すること、及び下層の家族が大都市における狹隘な小路の住宅に、より多く密集してゐることにある……

「貧困階級の子供が富裕階級の子供よりもより多く死ぬことは眞實である。だが然し、これは單に實數においてであるか、それとも比例においてであるか？ 下層階級はより多く單なる生存物資でもつて生活してゐるので、平均して富裕階級よりもより多く健康的であり、又より多くの子供を有してゐる。而して自然は幼兒の大部分に早期死亡の種を植ゑつけたものと思はれるので、貧者はより多くを喪失せねばならぬところから、よし彼等は同一の比例で失つてゐるに過ぎないとしても、實數においては必然により多くを失ふことになるのである。

「……然しながら、余が觀察の機會を有した限りでは、かくも多數の子供が死ぬのは注意の缺乏からでもなく、又食物量の不十分からでもない。それはより多く屢々、食物の過多と、注意の過多とに基いてゐる。余の考へるところでは、子供は吾々では一樣に、自然と彼等自身とに放任されることが少な過ぎる。かゝる贅澤な食物が與へられもしなければ又一般に、都市における同一階級の子供にすら與へらるゝ程度の多くの注意が與へられることもない田舎の農夫の子供の間では、この死亡率はより少ない。この死亡率を産み出すものは、疑

ひもなく、自家の若くは乏しい料理ではなくて、おそらく或る程度までその逆である。⁶⁾」

「食物不充分的の人口減退的結果については、理論家達によつて多く語られた。だが然し現實の事實はどうか？ もし吾々が、季節によつてか或ひは人間の罪惡によつてか生じたる飢饉を除外するならば、食物量の不充分から死亡する數は極めて些々たるものである。多分大ブリテンの全版圖を通じて一年に二百人とは實際の饑餓から死ぬまいし、又多分二千人とはその壽命を食物の不充分から短縮すまい。人口に及ぼすこの結果は、過多によつて及ぼす結果に比べて、いかほどのものであるか？ 豊富の産兒力減退的作用によつて年々生れ出づることから防止されてをる何千人もの外に、いかに多數の人間が事實上、毎年々々この豊富から死亡し、又それに何倍かしたる如何に多數の人間がその徐々たる害毒によつて彼等の天壽の長さを短縮してゐることであるか！」

——かくてグレイは、いま右に紹介しつゝあつた一連の記述に充てたる第一著の第六編第四章——「食物量は人口の進歩又はその増加率に如何に影響するか？」と題せる——に次の結語を與へて、謂ゆる反人口主義學說に最終的な斷案を與へんと企圖する。曰く、

「諸事實のこの分析よりして、一國民の大衆がぎりぎりの生存により近き食物量によつて生活することに比例して、この國民がより多く健康的且つ多産的となることが明白となる。反人口主義學說が據つて立つ觀念、人口は食物の豊富なるに應じて増加するといふ觀念は、それ故に根據がない。平均的な過多は、この學說が假定

6) Happiness of States, pp. 456—457.

7) Happiness of States, pp. 460—461.

するものとは全く反対な結果を産み出す。人口に及ぼすその影響は、増加せしむることではなくて實は減少せしむることである。大衆がより少く健康的となり、又より少き子供を産むのは、増加する人口がその成員を置き込むところの諸事情と結び付きての、食物の平均量の過多に比例するのである。⁸⁾

「これを要するに、」——とグレイは、今度は第二著の最終編において謂ゆる對立的二學說の結果を含めての若干の實際問題を取扱ひ、人口増加を促進すべき早婚は徳操にも幸福にも富裕にも有利であること、従つてこれを弾劾せんとする反人口主義者の所論は誤りである所以を論じ來たり、そしてその結論としていふのである——「人口主義學說は一方では、自然の實際の配劑に合致するばかりでなく、同時に愉快と、勤勉と、徳操の愛好と、更に吾々の隣人達や全人類への温情と、を鼓吹すべき學說であると考へられる。他方では、食物主義學說はこれらの自然の配劑に完全に矛盾すると同時に、意氣を沮喪せしめ、悪徳と放逸の風習とを促進し、かくて人間を墮落せしむるとともに人生の價値を下落せしむるの傾きある學說と考へられる。⁹⁾」

九、グレイ學說の論理的構造とマルサス批判の成敗

さて、以上五段に分つて紹述せるグレイの所論をその相互の關聯において綜觀してみると、第二段において紹介せる彼れの謂ゆる人口の原理、即ち

8) Happiness of States, p. 462.

9) Gray versus Malthus, p. 337.

A 「人口は増加する傾向はあるが過剰に増加する傾向はない。」

といふ命題は、その形態においてマルサス説と鋭角的に對立するとはいひながら、それ自身では未だ何の證明をも伴はざる、いはゞ一つの結論的命題たるに過ぎない。グレイの全論構においてこの命題Aを證明するものと見えるのは、

B 「人口の増加はそれ自身で附加的欲望に應ずるの力を運び來たる。」

といふ命題である。これは又、グレイにおいては「需要の増加は供給の増加を隨伴する、」といふ形態に置きかへられる。何故ならば、人口の増加はそのまゝ需要の増加であり、需要の増加は生産活動を刺戟して必要なる供給を作り出さしむるもの、と考へられてゐるからである。従つて、吾々が前掲第三段の記述において見たる

C 「食物が人口を規制するのではなく、人口が食物を規制する。」

といふ命題は、グレイの全學説をして「人口主義學説」とさへ自稱せしめた程の重要且つ特異なるものではあつたが、彼れの論理系統においては、實は右のB命題を言ひかへたもの、或ひは少くともB命題より推論せる一つの派生的命題でしかないやうに思はれる。何故ならば、グレイにおいては、人口は「需要」の數的表現であり、食物は衣服、住宅、等々とともに謂ゆる「流通體」の一種目、即ち「供給」の一つに外ならないのであつて、人口對食物の關係はより一般的なる需要對供給の關係の一つの發現形態と解せられてゐるからである。これによつて見ると、グレイの所論における基礎的なものは、ことさらマルサス説との對立において表現せ

られたるA命題でもなければ、C命題でもなく、實はB命題に表現されたる思想であることが分る。「人口の増加がそれ自身で附加的欲望に應ずるの力を運び來たる」こと、略言して「需要の増加に供給の増加が隨伴する」こと無しには、「人口は食物に比して過剩に増加する傾向なし」とも云ひ得なければ、進みて「人口は食物を規制する」とも主張し得ない筈である。更に又、上掲の第四段の記述において吾々の瞥見したる人口増加の作用論、即ち一言にして

D「人口の増加は所得と富裕と凡ゆる文明との根本源泉である。」

といふ命題は、一面歴史的事實との照合において説かれてはゐるが、グレイの論構にあつては矢張り右のB命題にその理論的根據を持つものである。何故ならば、グレイにおいて國民富裕の具體的内容を形成するものはその社會の流過程に持ち込まれたる謂ゆる「流通體」の總額即ち供給の總量であり、従つてこの供給量を増加せしむるものが——B命題に従つて——需要の増加即ち人口の増加であるとすれば、人口の増加は結局國民富裕の源泉である(D命題)といふことにならざるを得ないからである。かくて詮ずるところグレイにあつては、その主要なる殆んどすべての命題がB命題に、即ち吾々が第一段において解明せるグレイの需給理論に、潮宗してゆくものと思はれる。

そこで今、彼れの需給理論を振り返つて眺め、今日の用語に表現し直してみると、……一國民の福祉を決定するその社會の富が利潤を目宛てに流過程に持ち込まれたる凡ゆる種類の商品堆積から成り立つものであ

り、これらの商品が商品としてそこに在り得るのはその商品の保有する用役、従つて人間の欲望・需要がそれに向つてゐるからであり、かくて凡ゆる商品が需要に向つてのみ供給せらるゝものである限り、供給の量はつねに必ずず需要の量に投合・均衡化せねばならぬものであり、よしんばこの需給間の均衡が一時的に攪亂せられて商品の價格、従つて利潤が不當に下落したり騰貴したりすることは是れありとしても、人間が理性の判断と利己心に基く計慮とを有してゐる限り、その商品の供給の増加なり減少なりを臨機應變に行うて終局的には必ずず需給間の均衡を回復してゆくであらう、さればこそ人間は商品をして商品たらしむる欲望の、需要の、持主であるとともに、それに向つての供給を完全に調節する regulator である、……とグレイは論じたのである。

需給に關する右の所論が、今日の用語において一般に流通論上、乃至は價值・價格論上における「需給學說」の範疇に屬すること、そしてその限りに於いてグレイが古典派經濟學の本流の上に棹してゐたものであることは、すでに筆者の、第一段の叙述中に指摘して置いたところである。これは十九世紀初頭のイギリス經濟學界を完全に支配してゐたアダム・スミスの著作に遡つて見るまでもないことである。スミスとは云はず、グレイが以つて當面の論敵としたマルサス自身ですら、その當時はグレイと同じ「需給學說」の地盤の上に人口原理の展開を進めつゝあつたのである。そしてこの點はすでに日本における諸家の繰り返して指摘するところでもある。筆者自身の側にあつては、この點に關するマルサスの叙述を非常に重視し、彼れの理論における二つ

1) 例へば吉田秀夫氏著、經濟學說研究、282頁以下；堀經夫氏稿、經濟學史上に於けるマルサスの地位（小樽高商研究室編、マルサス研究、昭9年）34頁以下、等參照。

の原理——規制原理と増殖原理——の交互作用から成り立つところの人口擺動の理論を讀みとるべき鍵としてゐる。²⁾讀者もし上掲のグレイの所論をもつて例へば次に示すべきマルサスの所論に比照せしめらるゝならば、何故に前者が後者に對する「反對者」とならねばならなかつたかをさへ疑はるゝに違ひない。即ちマルサスは一七九八年の初版以來、數字の訂正と表現上の若干の修正のほかは本質的に何の變化も與へないで、人口對食物の關係をとほしてグレイの意味における需要と供給との均衡、均衡攪亂、及びその自働的なる回復の狀を、いとも克明に、全六版を通じて書き續けてゐるのである。曰く、

「吾々は先づ、或る一國の生存資料が、その國の住民を安易に扶養し得べき分量と正に等しかつたと假定しよう。然るに、最も惡徳なる社會においてさへなほ發動すべき、かの人口「増殖」への不斷の努力は、生存資料が増加せらるゝ前に、この國の人民數を増加せしめる。かうなれば、前に例へば一千百萬人を支へてゐた食物は、今や例へば一千百五十萬人の間に分配されなければなくなる。その結果、貧民の生活は益々惡化し、彼等の多くは猛烈なる困厄裡に投げ込まるゝに違ひない。労働者の數も亦、すでに市場における仕事との比例を超えてゐるので、労働の價格は必ずや低落するに至るべく、しかも食糧の價格はこれと同時に騰貴するに至るであらう。こゝにおいてか労働者は、前に得てゐたのと同額のことを稼ぐためには、より多くの仕事を爲さねばならない。この困厄期の間、結婚への失意と一家扶養の困難とが極めて大であり、従つて人口「増加」の進歩が阻害せられる。さる程に、労働の安價と労働者の豊富と、更には彼等の間における勤勉増加の必要と

2) 拙稿、マルサスの人口理論（上掲マルサス研究）174頁以下。——後に拙著人口理論と人口問題、200頁以下。

は、農夫を刺戟して彼等の土地に、より多くの労働を投ぜしめ、新たなる土壤を開墾せしめ、そして又既耕地を、より一層完全に施肥し且つ改良せしめ、かくてつひに生存資料は、人口に對して、吾々が最初出發したる時期におけると同一の比例、を有するに至らう。かうなると、又もや、労働者の状態が可なりに快適なるものとなるので、人口〔増殖〕への抑制は或る程度弛められて來る。さうして、短期間の後には、幸福に關する、此の同じ逆轉及び進轉運動が、反復せられるのである。³⁾」

かくてマルサスも亦、究極的には食物に對する人口の「需要」がそれに向つて行はるゝ食物の「供給」と均衡化すべきこと、否な更に進みては、かの「需要」の増加がこの「供給」の増加を促進する一面のあることをさへ、明白に縷述してゐるのである。たゞ然しながら、マルサスにおいては、この「供給」に對するかの「需要」の働きかけは決してグレイにおけるが如く、つねに效果的且つ一方的であるわけではなかつた。「需要」(人口)の増加は「供給」(生産)の増加に驅り立てはするが、後者の増加は結局のところ土地の有する自然の制限に衝き當らざるを得ないし、前者の保有者たる「人口」は不斷に増加して或る時點に與へられたる「供給」との均衡状態を掻き亂さうとする。いはゞ人口はマルサスにおいては、生存資料の需給間に均衡化的と、及び均衡攪亂的との、實に兩面の作用を爲すものであつた。⁴⁾しかもマルサスにあつては、グレイにおけるとは異なつて、かゝる意味の均衡化が終局的には達せられると見るだけで、決して問題が終るのではなかつた。均衡化はいかにして果さるか、それはいかなる惡を人間社會に生ぜしむるか、——然りグレイが「忍耐をもつて忍

- 3) Malthus, An Essay on the Principle of Population, 1st ed. pp. 29—31; 2nd ed. pp. 12—13; 5th ed. vol. i, pp. 25—27; 6th ed. vol. i, pp. 17—19. 傍點原文(第六版より引く).
- 4) 拙著, 人口理論と人口問題, 200頁以下, 特に208—211頁參照.

べば事は済む」と考へた均衡攪亂時の状態そのもの——がマルサスにとつては問題であつた。いはゞマルサスの問題はグレイにおける問題の終るところから始まるのである。

同じ需給學說の地盤の上に立ちながら何故にグレイがマルサスとは全く相反するが如き結論に走りゆかねばならなかつたかは、こゝから一つの説明を見出し得る。グレイにおける最根本的なものは、筆者の見來つたところでは、結局その特有なる需給理論に歸着する。この一本の柱にして倒さるゝならば、彼れの全學說は次に崩壊しゆくの外はない。彼れのマルサス批判の細目も多くはこの見地から出發するものである限り、その成敗も亦右の根本見地の成敗と運命を共にすると見ていゝであらう。然らば右の根本見地——需要萬能論——はこれを如何に評價すべきであるか？

先づ何人の目にも顯はなるグレイの謬見は、「人口」の増加がそのまま直ちに「需要」の増加と見られてゐる點である。人口の増加が欲望の増加を伴ふこと、而して後者が或る程度まで又需要の増加に反映することは確かである。然しながら單なる欲望が、直ちに供給に働きかくべき需要であり得ざること、前者から區別して特に後者を「有效需要」と名付けたアダム・スミス以來一般に知れ渡つた事柄である。⁵⁾グレイにおいては何よりも先づ、需要の概念に結びつくべき購買力の概念が落ちてゐるのである。購買力の伴はぬ欲望は、従つてその保持者たる人口は、いかに増加したとて、まさにグレイがその眼前に見てゐた如き流通社會においては些かも需要の總額を増すには至るまい。むしろ需要の内容は——たとへ購買力を伴はぬ欲望であつても人口の増加

5) Cf. Smith, Wealth of Nations, Bk. I, Ch. vii. (McCulloch's ed. reprinted, p. 58.)

につれて増しゆく場合には——變り得よう、例へば快適品の需要が減じて生活必需品の需要が増すといふ風に。然しかういふ仕方では到底、人口の増加が需要の増加となるとは論ずるを得ない筈である。

この謬見は又、一國の富の増加がそのまま直ちに「雇傭」の増加となるといふ見解にも現はれてゐる。この點では然し、グレイはとりたてゝ非難さるゝに當らないかも知れない。何故ならば、アダム・スミスでさへもこの點で誤まつてゐたのだから。而してこのスミスの謬見を指摘して、富の増加、資本の増加はそのまま直ちに労働者を「雇傭」すべき賃銀の増加となるものではないと論じ出でてカール・マルクスの所論に一先鞭を着けたものがマルサスその人であつたことは、筆者が往年の一著作で逸早く論明したところである。⁶⁾

グレイの犯してをる次の誤りは、供給の増加が何の制限もなく需要の増加に應じ得るとの見解に横はつてゐる。なるほどグレイは一農夫に例を採つて、彼れがその父又は同じ農圃の以前の所有者達が行ふた面積割當ての計算に助けられ、又彼れ自身の経験と市場への不斷の注意とに基いて、この農夫が如何に賢明にその「供給」を「需要」に適合せしむるかを、詳しく説明してはゐる。然しながらこれはまだ——全體として購買力の増さぬ欲望の増加が僅かに需要の方向を變更するに止まつて需要總額を少しも増さしめ得ないことと同様に——農産物供給の方向の變更を示すに止まつて、何故に供給の總量が増すかを示してはゐない。實のところグレイにあつては、供給の増加は餘りに單純に考へられ過ぎてゐる。人口の増加は欲望の増加となる反面に労働力の増加となり、労働力の増加はそのまま生産の増加となると考へられ、そこでは資本が、そして更には自然資源が、

6) 拙著、人口法則と生存權論、昭3年同文館、235—237頁參照。

考慮の中に入れられてゐないのである。この點にグレイの全所論の根本缺陷を見、その非を指摘した最初の人
 は、おそらくモールであつたらう。即ちモールはいふ、「この見解の正しくないことは明瞭である。新たな價
 値の造出の爲めには單に労働だけが必要であるばかりでなく、いかなる場合においても、適當の資本も必要で
 あり、更にはより廣き土地とか或ひは生産品の新たな販路とかが必要である。これらすべての條件は人間數
 の増加とは決して必然的に關聯するものでなく、却つて全く違つた法則に服するといふことは證明を俟つまで
 もない。生存資料と人間數とが必ず平衡を保つとは、それ故に、言ふことが出來ない」と。

かく見來つて、その最も根本的なるべき部分——B命題——にさへ容易に指摘し得べき諸缺陷の伏在するの
 を突きとめるならば、今更ながら人はグレイの全學説が極めて薄弱なる基礎の上に立つてゐることを肯くであ
 らう。そのうへグレイの所論には、文中にすでに筆者の註記しておいた通り前後矛盾するところも見受けら
 れ、歴史的事實に對する極めて一面的な觀察も織り成されてゐる。然しそれらにも拘らず、本稿の筆者がマル
 サス學説との關聯においてこゝに特に注意したいと思ふのは、グレイの人口學説が、よかれあしかれ一つの經
 濟學的流通理論から發足してゐるといふ點である。マルサスの學説は普通に、多分の農業的性質を有するもの
 と謂はれてゐる、従つて又、マルサスの見たる人口問題はむしろ一つの生産問題であつたとも解されてゐる。⁸⁾
 然るにグレイは最初から——専らといふてよい程度に——經濟生活の流過程に着眼した。彼れの「流通體」
 の理説は、なほ極めて素朴なる形態をとつてをるとはいへ、「所得流通體」と「用費流通體」とに分ちながら總

7) v. Mohl, Geschichte und Literatur der Staatswissenschaften, III. Bd. Erlangen 1858, S. 50.

8) E.g. Cannan, Theories of Production and Distribution, 3rd ed. London 1917, p. 138; Mombert, Bevölkerung und Arbeitsmarkt, in: Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 36, Heft 1 (Juli 1932), S. 165—166.

ての經濟者、彼れの謂ゆる「流通者」がこの二側面において相互の交渉に入り込み、一者の「用費」はやがて他者の「所得」を成り立たしむる所以を説いてゐる。グレイはすでに現代學者の謂ゆる經濟生活の循環を説き、こゝより彼れの特異なる需要萬能論へと進んだのである。従つてグレイにとつての問題は、人口と食物との比較速度といふ意味における生産問題であるよりも、むしろ「流通體」を繞つての「用費」と「所得」、「需要」と「供給」との、一つの流通問題であつたのである。

右の如く解せられたるグレイ學說の理論的性格がそれ自身として、又その時代との關聯において如何に見るべきかは、なほ後に觸れることにしよう。こゝでは、なほもう一つグレイ學說の一骨格を成す記述、即ち本稿においてグレイ說の第五段として紹介せる人口増加の反作用論及びそれに關聯しての人口増加將來の豫想觀に説き及んで置かなければならない。この點に關するグレイの所論は、これを簡略にして

E「人口の増加に伴ふ富裕の増加は奢侈と過食とに導き、これが又逆に人口に減退的反作用を與へる。」
といふ一句に要約し得るであらう。グレイがその「隣人達の間への一瞥」からして、人間の生活がその最低必要度に——「パンと水」との生活に——接近すればするほど、産兒力は益々高まつて來ると主張する場合、いまだ確固たる科學的基礎の上に立つてゐなかつたこと、従つてそれは局部的觀察に由來する一つの獨斷でしか無かつたことは誰れの目にも明かである。然しグレイはこの記述を通して、謂ゆる文明の進歩が人口増加に減退的反作用を及ぼすといふ、より近代的なる人口理論に夙に一つの先鞭を着けてゐるのであつて、この點は前

に筆者の指摘したところである。更に又、グレイの記述の中には、これを仔細に檢すれば後に登場し來たるスペンサー學説の根本命題にまで發展すべき思想の萌芽さへ見出される。即ちシヤンの既に指摘せる通り、グレイはその第二著の中で次の如く云ふてゐるのである。「一般に、肉體的勞働は生殖的特質を有し、精神的勞働はその反對の作用を有すると確言してよろしい¹⁰⁾」と。この一句はグレイ學説の全證明にとつては全く附隨的でないけれども、すでにこゝに新興の自然科學の影響を示してゐるものと云へる。だが筆者が今こゝで問題にしようと思ふのは、右にいふE命題は前掲の諸命題特にC命題と論理的に如何に關係するかといふことである。

C命題によれば、「食物が人口を規制するのではなくて、逆に人口が食物を規制する」のであつた。食物の存在量・供給量の大きなるか小なるかに従つてそこに生存し得べき人間數の大小が定められるのではなくて、實は人間數が大となるか小となるかに従つてそこに供給せらるべき食物量の大小が定められるといふにあつた。それ故にこゝでは、食物は飽くまでも *Passive* なもの、人口は飽くまでも *active* なものであつた。然るに今、E命題に至つて「食物の豊富が人口に減退的作用を及ぼす」といふ思想を探つてみると、たとへマルサスとは逆な方向と異なる仕方とにおいてではあつたにせよ、なほかつグレイには、食物を *active* とし人口を *Passive* とする見方が存するのではないか？ 然りとすればこの見方は前のC命題と矛盾する。食物は人口を規制せずとの命題を一貫しようとするれば、その食物の豊富が人間を不胎的ならしめるとも、又その缺乏は多産的ならしめるとも云ひ得ない筈であるし、逆に又E命題の如く食物量の大小が人間の生殖力に影響することを承認すると

9) Schian, Die englischen Optimisten in ihren Bevölkerungstheorien, S. 9.

10) Gray versus Malthus, p.19.

せば、食物は人口を規制せずとのC命題は論理的には成り立たぬ筈である。而してE命題が産兒數に關する彼れの日常の觀察に基くもので動かし難いものであるとし、又C命題が彼れの流通理論に基礎を置いたB命題より派生せるもので同様に拒否し難いものであるとすれば、彼れは高々、C命題を「食物は人口を規制せず」といふ代りに「人口は食物を規制し、逆に又食物は人口を規制する」、即ち「兩者は交互作用の關係にあり」とのみ表現し得た筈ではなからうか。

マルサスは時に、物質的なる生存資料の存在量をもつて人口の大小を左右する規制者と見る根本見地に立脚してゐた限り、いはゞ一つの物質的歴史觀の把持者であつたと稱せられてゐる。¹¹⁾ 通俗的にいへば、それは食物中心の歴史觀であつたとも謂ひ得よう。グレイはこれに對して人口中心の史觀を極度に高調した。これ彼れが、謂ゆるマルサスの「食物主義學說」に對して自説を「人口主義學說」と稱へた所以である。然しグレイは結局、人口増加の反作用を承認することにおいて、自からは意識することなしに半ばマルサスの史觀の軌道に従ふ結果となつたと見ることが出来る。

一〇、グレイ及び一般人口主義學說の歴史的並びに理論的意義

すでに説けるところよりして、人口學說史上にグレイの占むべき地位は次の通りに概括し得られる。

11) E. g. Budge, Das Malthus'sche Bevölkerungsgesetz und die theoretische Nationalökonomie der letzten Jahrzehnte, Karlsruhe 1912, S. 220; Sombart, Der moderne Kapitalismus, III. Bd. : Hochkapitalismus, I. Halbbd. München u. Leipzig 1927, S. 309.

生存資料に對する人口の過剩増加を信ぜず、人口多ければ多きほど生存資料の多々益々増加しゆくべきを信ずる點において、グレイは先づ確かに「樂觀論者」であつた。然しこの特徴付けは、エルスターその他の記すとほり「將來への期待」をグレイが抱いてゐたといふ意味からではない。グレイは現在について、人口對生存資料間の調和を信ずる樂觀論者であつたのである。そして「將來への期待」はグレイにおいてはむしろ反對に、かなり濃厚なる悲觀論的見解となつて現はれてゐた。富裕の増加、奢侈生活の一層の普及化につれて、人口減退的諸原因は益々加はりゆき、かくてつひにこれらの諸原因は人口増加促進的諸原因を凌駕するに至り、人口増加の停止状態乃至減退状態の出現さへ可能とならうと考へたのである。この意味において、グレイは十九世紀前葉に輩出したる多くの樂觀論者から——但し明確に將來における「不生殖點」の到來を豫想せるウェイランド¹²⁾等を除いて——部分的に自からを區別せしめ得るであらう。

經濟諸過程の根柢に人間の利己心を見、國家の政策的干渉を無用有害として斥けたる點において、グレイは又、たしかに「自由主義者」であり「功利主義者」であつた。然し彼れは、この點においては決してモムベルトその他の爲す如くはその論敵のマルサスからも、又、反マルサス陣營内の爾餘の者からも、彼れ自からを區別せしめ得ない。これらの者から區別し、彼れ自からの學說の特徴を最もよく浮出せしめ得る名稱は「ポピュレイシヨニスト」(人口主義者)の外にない。

ポピュレイシヨニストとしてグレイは、その當時すでに、同じ反マルサス陣營の内部から同種意見の人々

12) Weyland, The Principles of Population and Production, London 1816, p. 108 ff.

(グレイアム、ウェイランド等)を見出してゐた。然し筆者の今迄の詮索の限りでは、經濟學的基礎理論から出發してグレイほど大膽に且つ一方的に、謂ゆる人口主義學説を展開しようとして試みた者は他に存しない。グレイ學説の偏局性は最も多くこの側面に見出さるべきものであると同時に、一つのマルサス批判並びに學説それ自體としての特殊性も亦主としてこゝに存すると云へるであらう。

マルサス批判としてのグレイ學説の成敗はすでに明確である。マルサスの問題は事實において、グレイの問題が終るところから發足するのであつた。だが然し、グレイの所論は、この故に全く消極的たる意義をしか有しないのではない。聰明にもすでにシヤンの指摘せる通り、グレイの「論述は何ら論理的構造を有せざる諸命題ではあるが、人口問題の考察において全く新たな見地を曳き入れたといふ功績を有する、即ち人口に及ぼす既存食物の影響といふことに對して一度びその裏返しが行はれたのである」¹³⁾。それは必ずしも「全く新たな見地」ではなかつたかも知れない。マルサス以前には、多く、かゝる見地が横行してゐたからである。マルサス自身は彼れ以前及びその當時におけるこの種の見地を論破するに努めた。然しながら、別の機會において筆者の解明せる通り、人口増加の有する active な側面をマルサス自身も否定してゐるのではなかつた。たゞそれを前景に立たしめ得ざりし事情の爲めもあつて、つひに人類歴史の全畫面を濃き陰暗の一色で塗りつぶしてしまふ結果となつたのである。¹⁴⁾グレイは今、マルサスに隠れ終つたる人口のこの側面を前景に持ち出した、しかもその論據をマルサスの主として着眼せるものとは異なつたる經濟生活の流通過程の法則に置かうとし

13) Schian, Die englischen Optimisten, S. II.

14) 詳細は拙著、人口理論と人口問題、95—98頁参照。

た。——筆者はこの點に、人口學說史上におけるグレイ說の特殊なる意義を見ようとするものである。

この點に比すれば、彼れが人口増加に及ぼす文明諸要素の影響を説きて謂ゆる福祉學說への一先鞭を着けたること、都市人口の減退的傾向を指摘して田舎人口よりする不斷の補給を説明し謂はゞ後代のハンゼンの見解¹⁵⁾への一近似を示せること、等々は左程とり立て、彼れの所論を評價するには當るまいと思ふ。事實においてグレイは後代に與へたる影響¹⁶⁾よりも、むしろその時代から受けた影響の方が大きかつたであらう。彼れはその人口學說を經濟學上の需給理論に基礎を置きはしたが、マルサス學說との對立において彼れの高揚せる問題は依然として人口と食物との優位問題に外ならなかつた。十九世紀前葉に續々として登場し來たるマルサス批判者は、僅かなる例外(ダブルデイ及びスペンサー)を除いて、その殆んどすべてが、マルサスの用ひたる範疇において「人口問題」を取扱ふのである。のみならず、グレイは人口の増加がそのまま生産の増加に結果すると考へ、人間技術における無限の進歩を假定せる點において、明白に、十八世紀末より十九世紀初頭にかけての、かの史上に比類なきイギリス産業の熱狂的發展に魅了せられてゐる。眼前になほ、無際限に展開しゆくと思へた人間労働力の進歩、産業技術の躍進は、彼れをして深き洞察を生産の側面に、沉んやその自然的制約の探索に向くことを妨げ、需要の増加は必ず供給の増加を伴ふとの觀察に追ひ込んだものと解せられる。この觀察は又、人間の意思による完全なる自然の支配といふことでもあつたのである。かくてこのイギリス産業の比類なき發展期に、グレイ學說の據つて成り立つ社會經濟史的根據があつたと謂ひ得るであらう。

15) Georg Hansen, Die drei Bevölkerungsstufen, München 1889.

16) この點につきては僅かにフィールドが Joseph Lowe 及び Poulett Scrope への影響を指摘したに止まつてゐる。—— Cf. Field, Essays on Population, Chicago 1931, p. 24.

最後に然らば、グレイの學說及び同時に一連の「人口主義學說」は如何なる理論的意義を有するものであるか？ 筆者は今、この問ひに、たゞ次の如く答ふるにとどめる。それは、この老なる論稿一篇を結ぶの言葉としては輕きに過ぐるかも知れない。だが、より具體的、より包括的な回答は、この篇に續くべき諸論稿の完結を俟ちてのみ、否な更にはわれみづから營み上ぐべき一人人口理論體系の中においてのみ、正當に果され得べきものなることを、筆者はよく知つてゐるからである。

およそ人口理論——進みてはそれを一部門として内に包容する人口學——は、よしんばマルサスの意味において人口對生存資料の關係から發足することは無いにしても單に人口それ自體の考察からではなく必ずや人口を何らかの對手——筆者は今それを「經濟」と見るモムベルト的立場以上には出でてゐない——との關係において取扱はなければならず、そして然る限りこの理論は、今の假定に基いて定式化して云へば正に人口對經濟の關係を理論的並びに歴史的に如何なるものとして樹立するか、即ちグレイの立言様式になぞらへていへば、果して經濟が人口を規制するか或ひは逆に人口が經濟を規制するか、それとも又兩者の間には相互作用の關係が存するかといふ問題を、その一つの重要な課題として果さなければならぬ。表現の様式こそ異なれ兎も角もマルサスはこの重要な課題に基礎工作を加へたのであり、又その反對者の一群ポピュレイションニストは正に對角的な見地よりマルサスの牙城に迫らうとしたのである。この意味においてポピュレイションニストよりするマルサス論争の一戦線は——たとへその内容は如何に空疎であつたとしても——確かに人口理論上の一つ

の焦點には觸れてゐたのである。

(一九三六・九・六)